



日本財団 助成事業
The Nippon Foundation
船の科学館・海と船の博物館ネットワーク

開館五周年記念特別展

天草

海流に魅せられた島

— 祈りの原点とキリシタン文化

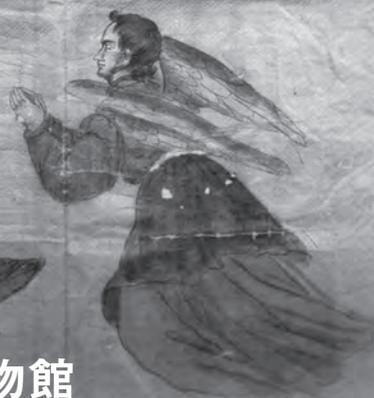


開館五周年記念特別展

— 祈りの原点とキリシタン文化

天草

海流に魅せられた島



西南学院大学博物館
西南学院大学

ごあいさつ

本学博物館は2006年5月13日に開館し、5年の月日が経ちました。これまでキリスト教に関する特別展を開催し、日本はもとよりアジア圏におけるキリスト教文化を紹介してきました。また、キリスト教の源流であるユダヤ教にスポットをあてて、ユダヤの美術工芸品を取り上げたジュダイカ・コレクション展もおこなってまいりました。

5年間の取り組みのなかで、シリーズ企画を実施しております。九州のキリスト教シリーズやジュダイカ・コレクションなどは数度にわたり開催し、現在では多くのリピーターに恵まれております。最近ではこのシリーズを楽しみにされている方もおられ、本学博物館のこれまでの取り組みが浸透してきたことを感じています。これからも大学博物館は多くの情報を発信し、研究成果を社会に還元することを目指していきます。大学博物館設置の骨子である「社会に開かれた窓」として、これからも活動していく次第です。

本展覧会は熊本県西部に浮かぶ「天草島」を取り上げたもので、九州のキリスト教シリーズ partⅢにあたるものです。周囲を海でかこまれた天草島は、自然と向き合った日常生活と、海外との交易を通じて新しい文化を築いていました。また、キリスト教伝来にともなう島内にはキリスト教関連施設が設けられるなど、天草は東西融合の地として知られています。ここ天草の地においてどのような文化が形成され、人々による信仰がおこなわれていたのか。本展覧会を通じて、脈々と続く天草島特有の歴史や文化、海外との交流の実相を再認識していただければと思います。

なお、本展覧会開催にあたり、天草市教育委員会、天草市立天草キリシタン館に多大なるご配慮を賜りました。そして、天草市の学芸員2名からも本図録にご寄稿いただくとともに、講演会にもご協力いただきます。本シリーズの趣旨のひとつでもある、“地域からの視座”を取り入れた5年目の節目にふさわしい展覧会となりました。また、本特別展は船の科学館・海と船の博物館ネットワークから支援をうけて開催することとなりました。ご協力いただきました関係各位に対しまして衷心より御礼申し上げます。

2011(平成23)年6月6日

西南学院大学博物館
館長 高倉 洋彰

開催趣旨

本展覧会「海流に魅せられた島 天草—祈りの原点とキリシタン文化」は、海で囲まれた天草島においてどのような文化が形成されており、ここで生活が営まれていたのか。さらに島国ゆえにどのような信仰がおこなわれていたのか、歴史的背景をもとに当時の天草島の文化受容の一側面を紹介するものである。

天草は中世から大陸と交流しており、多くの文物が行き交っていた。今日発掘されている中国産陶磁器などはこれに代表されようが、天草はアジア物流の一拠点ともなっていた。また、天草にキリスト教が伝わったのは1566(永禄9)年で、伝道したのはアルメイダ神父である。これを受けてキリスト教関連施設が造られ、天草のコレジオでは多くの天草本といわれる書物が刊行されている。天正遣欧使節が海をわたって持ち込んだ活版印刷の技術が天草の地で活用されていたのである。

この一方で、幕府の宗教政策に左右されることにもなった。幕府による禁教政策は多くの天草のキリシタンを苦しめ、この反動が天草四郎時貞率いる「島原・天草の乱」の勃発へとつながった。乱の終結により、さらに厳しい監視下におかれることになるが、ひそかに信仰を守った人たちの姿が天草にはあった。

このように天草島は海外との交易の窓口を担うなかで、島国特有の文化を形成し、さらにキリスト教文化も取り入れていた。天草の地にはコレジオが設けられ、キリスト教伝道のための書籍が刊行されている。「九州のキリスト教シリーズ」で取り上げた、島原、大分とは異なる様相を提示できればと考えている。

目次

ごあいさつ

西南学院大学博物館 館長 高倉 洋彰	2
開催趣旨	3
目次・凡例	4

本編

I. 海流融合の地 天草	5
II. 天草島と文化の芽生え	9
III. 弾圧とその果てに	
1. 天草四郎と島原・天草の乱	15
2. 弾圧と信仰のはざま	24
3. 島の信仰	27
IV. 海外交流の地天草	
1. 浜崎遺跡出土遺物	34
2. 棚底城跡出土遺物	35
3. 河内浦城跡出土遺物	36
4. 三川城跡出土遺物	37

論考

海の領主「天草五人衆」と天草へのキリスト教伝来 天草市教育委員会 中山 圭	39
近世初期天草とキリスト教の状況 天草市立天草キリシタン館 松本 博幸	42
天草における宗門改 ― 影踏と踏絵 ― 西南学院大学博物館 学芸員 安高 啓明	45

謝辞・イベント情報	49
-----------	----

出品目録	50
------	----

凡例

- ◎本図録は西南学院大学博物館開館5周年記念特別展「海流に魅せられた島 天草―祈りの原点とキリシタン文化」
〔会期：2011(平成23)年6月6日(月)から7月13日(水)〕開催にあたり、作成したものである。
- ◎図版番号は出品目録番号に対応するが展示順番とは必ずしも一致しない。
- ◎本図録に掲載している写真は各所蔵先の許可なく転載・複写することを認めない。
- ◎本図録の資料解説および全体編集は安高啓明(本学博物館学芸員)、英文翻訳は中松沙織(本学大学院国際文化研究科研究生)がおこなった。編集補助に本学博物館臨時職員の貞清世里(本学大学院国際文化研究科博士後期課程)、平川知佳(本学大学院国際文化研究科博士後期課程)、中尾祐太(本学大学院国際文化研究科博士後期課程)、中松沙織(本学大学院国際文化研究科研究生)、小林史奈(本学大学院国際文化研究科博士後期課程)があたった。

I

海流融合の地 天草

天草の地名は「続日本紀」の記載で確認されるなど古くから固有の“島”として認識されていた。天草島での豊富な漁業はさることながら、海外との交易も盛んにおこなわれていた。多くの古地図でも天草の所在は記されており、九州を構成するひとつの島として把握されていたのである。なかには中国人が作成した地図にも確認することができるなど、日本にとどまらず、アジア圏でも周知されていたのである。





1. 天保国絵図

国立公文書館
 原品：国指定重要文化財

天草は熊本県西部の海上に点在する諸島で形成され、波太(大矢野島)・天草・志岐・恵家・高屋の五郷で構成される。「安万久佐」などとも表記され、古くは『続日本紀』天平16(744)年5月条で天草の名称を確認することができる。天草はその地勢から漁業と製塩が主要産業だった。1566(永禄9)年、ルイス・デ・アルメイダ神父が来訪すると、キリスト教関連施設が建てられ、キリスト教布教の一拠点となった。この絵図は江戸幕府の指示で作られた天保国絵図で、1835(天保6)年にその作成が命じられ、1838(天保9)年に完成した。1里を6寸とする縮尺(約21,600分の1)で描かれ、勘定奉行や勘定吟味役、目付などがこれを実質的に指揮した。天草島内も詳細な記載がみられる。



Map of the Tenpo period

This map was drawn under the Edo Shogunate in 1838. Amakusa was formed by five villages.



2. 南蛮船

天草市立天草キリシタン館

南蛮とはポルトガル・スペインを指す。1543(天文12)年にポルトガル船が種子島に漂着したことから日本とポルトガルの交流(「日葡交流」)がはじまる。1549(天文18)年にはフランシスコ・ザビエルが鹿児島島に上陸し、キリスト教の布教がはじめられる。1550年代には定期的に平戸や長崎を訪れるようになり、鎖国令(海禁令)が発布されるまで頻繁な往来があった。天草には1570(元亀元)年にポルトガル船一隻が志岐に入港していることはよく知られる。キリスト教の布教も兼ねて、多くの宣教師たちがこの天草の地を訪れていた。南蛮船の寄港地は富で潤うことから、南蛮船は“財福の象徴”とされた。

Portuguese (Namban) Ship

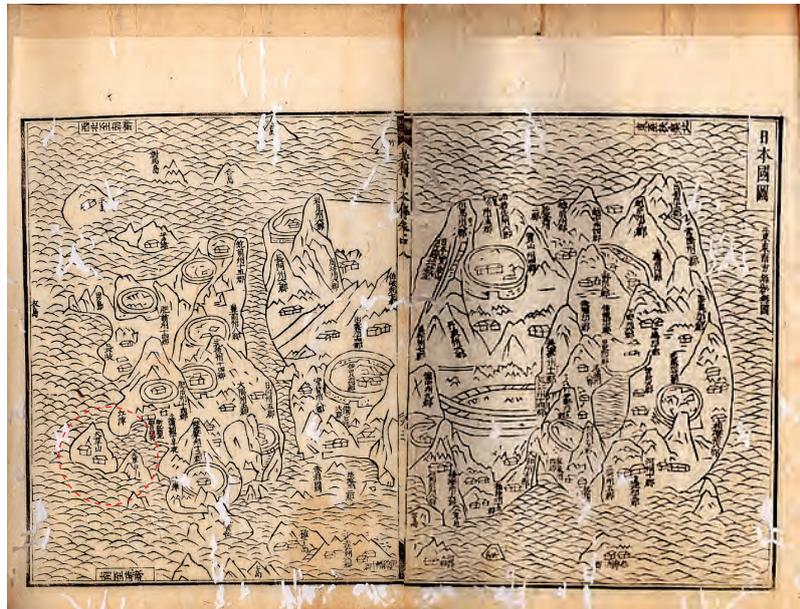
"Namban" denotes Spain and Portugal. Missionaries had dispatched to Japan by Namban ship since 1550s to 1639. The first arrival at Amakusa was in 1570.

コラム 南蛮人と紅毛人

江戸時代に日本を訪れた外国人(イエズス会士)のことを「南蛮人」と呼んでいた。この表現は中国の中華思想(華夷秩序)に基づくもので、中国(中華)を中心とその周囲には四夷(「東夷」・「北狄」・「西戎」・「南蛮」)があるとみなしていた概念に依拠したものである。中国の影響を強く受けてきた日本にも華夷思想の概念があった。「南蛮」という字があらわすように、本来は東南アジア方面の人をさして南蛮人という。当時のポルトガル人たちは東南アジアを経由して日本へ来たため、「南蛮人」とされたのである。その後、オランダ人が訪れるようになると、その身なりから「紅毛人」と表現されるようになっていった。「南蛮人」から「紅毛人」へと当時の外国人の呼称も変化していった。



「天草山」部分拡大



3. 登壇必究

九州大学附属図書館付設記録資料館

おうめいかく

王 鳴鶴が執筆した書物で、1599(明・万曆29)年に刊行されている。このなかの「日本国図」では九州をひとつの島国としてとらえ、おおまかに九州ならびに五島、平戸、対馬、天草を配している。この資料は、日本の地勢をよくとらえて記されており、要衝となる部分も地図上で表現されている。天草の箇所には「天草山」と書かれ、ふたつの島から構成されていることがわかる。中国人が描いた地図としては正確な部類になる。

Toudanhikkyu

A book on military strategy written by a Chinese writer Ohmeikaku in 1599. It includes Japanese map.



4. 武備志

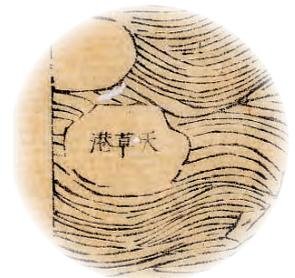
九州大学附属図書館付設記録資料館

ほうげんき

茅 元儀が1621(明・天啓元)年に完成させた兵書であるが、このなかには東アジア・東南アジア各地の地図、「日本図」も収録されている。九州は「西海道九州」と記され九州諸国が丸囲みである。天草は「阿久根」・「京泊」の右下方の海上に浮かび、「天草港」と記されている。周囲には「平戸」・「壱岐」・「対馬」が配されるなど、地図としては不正確であるが、当時の中国における天草の認識がここに示される。

Bubishi

A book on military strategy written by a Chinese strategic scholar Bougenki in 1621. It includes maps of East Asia, Southeast Asia, and Japan.

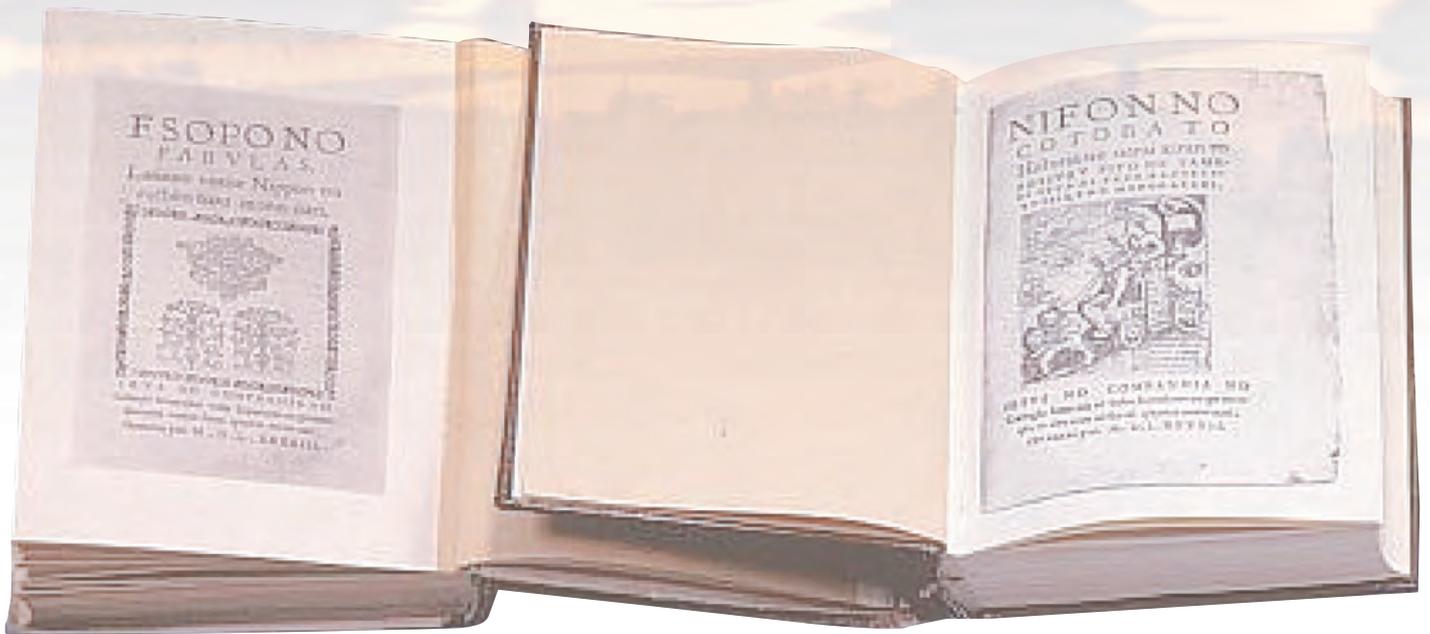


「天草港」部分拡大

II

天草島と文化の芽生え

天草は1566年のキリスト教伝道により、イエズス会から布教の一拠点として位置づけられた。アルメイダ神父が訪れたことでコレジオが設けられ、天草学林では多くの出版物が刊行された。こうしたこともあり、多くの島民にキリスト教は受け入れられていった。天草の人々は、信仰のあり方を見出すとともに、これまでになく新しい意匠を生み出していったのであった。





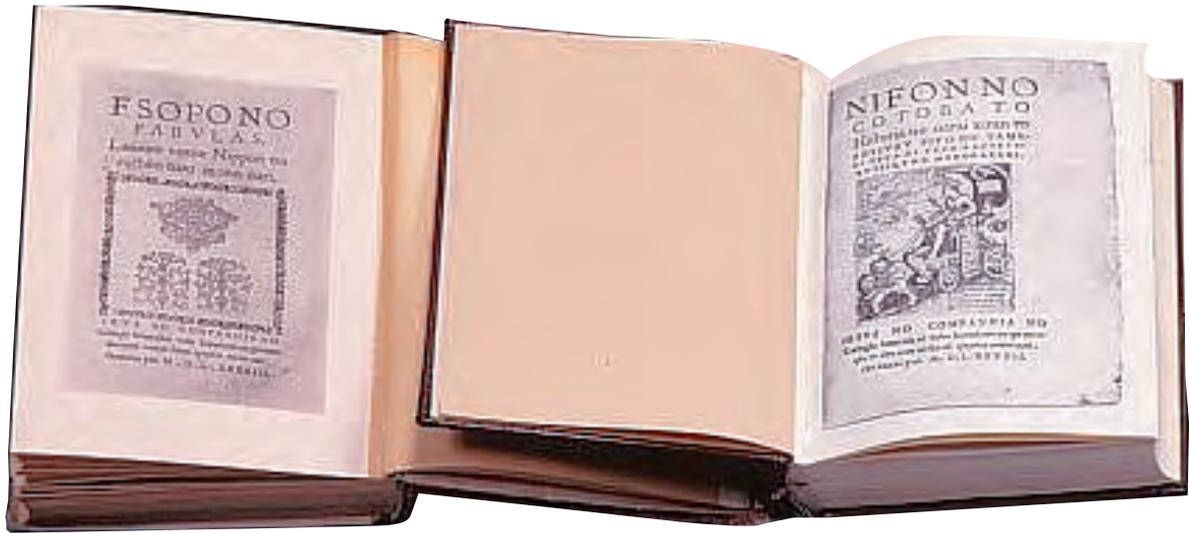
5. アルメイダ像デッサン

天草市立天草キリシタン館

ポルトガルのイエズス会宣教医であるルイス・デ・アルメイダ(Luis de Almeida)は1552(天文21)年に平戸へ到着し、布教のかたわら医療普及に努める。豊後府内で育児院を建設、1557(弘治3)年には洋式入院設備を整えた病院を設け、初代院長となっている。アルメイダは1566(永禄9)年に天草にキリスト教を伝え、志岐には教会堂も建設された。天草にキリスト教を伝道した最初の人物で、1569(永禄12)年には河内浦でも布教を始めている。

Sketch of Luis de Almeida

Luis de Almeida was a Jesuit medical missionary from Portugal.



伊曾保物語中表紙



平家物語中表紙

6. 天草本 伊曾保物語

天草市立天草キリシタン館

「ESOPONO FABVLAS」(イソポのファブラス)は、いわゆるイソップ寓話で、宗教に無関係な西洋文学作品である。1593(文禄2)年にイエズス会天草学林で刊行された日本初の邦訳書で、日本人のイルマン高井コスメが関与したのではないかとされる。本文は「イソポが生涯の物語略」(イソポ略伝)と「イソポが作り物語の抜書」(寓話)の二部だてとなっている。

Aesop's Fables

"Aesop's Fables" was translated into Japanese by Jesuits in Amakusa in 1593. It was the first Japanese translation published in Japan.

7. 天草本 平家物語(復刻本)

天草市立天草キリシタン館

1592(文禄元)年にイエズス会の天草学林で発刊され、源平合戦の様子を描いた平家物語を口語訳したもの。原書には「日本の言葉と歴史を習い知らんと欲する人のために世話にやわらげたる平家の物語」とある。来日したキリスト教宣教師たちが日本語および日本史を学ぶために発刊されたもので、ポルトガル語綴りのローマ字で記されている。全四巻からなり、当時の貴重な口語資料として原本は大英図書館が所蔵している。

The Tale of Heike

This book was published by Society of Jusus in Amakusa in 1592. The story is about a battle between Genji and Heike.

コラム 天草で印刷～活版印刷～

1590(天正18)年に天正遣欧使節がローマから持ち帰ったものなかに活版印刷術がある。活版印刷術はドイツで発明された。この活版印刷技術を用いて旧約聖書・新約聖書が印刷されたが、これらは『グーテンベルグ聖書』とも呼ばれる。日本では島原半島の加津佐に設けられていたコレジオで最初に活版印刷がおこなわれていたことは知られる。天草では1591(天正19)年に神学校(コレジオ)天草学林が設けられ、ここで多くのキリシタン版とよばれる書物が刊行された。羅針盤・火薬とならんで、ルネサンス期の三大発明のひとつが天草の地にもたらされていたのである。



8. メダリオン

天草市立天草キリシタン館
天草市指定文化財

信仰の拠り所として信者たちが身につけていたメダイ(メダリオン)は、キリストや使徒を鋳込んで3世紀には作られていた。日本にはフランシスコ・ザビエル来航以降、各地で製作されている。このメダリオンはヨーロッパ製をもとに17世紀初頭に天草で作られたもので、現在天草市指定文化財(工芸)となっている。銅製楕円形のメダリオンで、表には「ラ・ストルタにおける聖イグナチオ」、裏には「無原罪の聖母」が鋳込まれている。三日月のうえに手を合わせて立ち、光を帯びた姿は「無原罪の御宿」をよく表現している。昨今まで河浦町崎津のキリスト者が所有していたもので、天草におけるキリスト教信仰の姿を物語る資料として貴重である。

Medallion

This Medallion was made in the early 17th century. The image of St. Ignacio was carved on the obverse side of the medal, and the Virgin Mary on the reverse side.



9. 織部南蛮人燭台

天草市立天草キリシタン館

南蛮人をモチーフとして作られた燭台で、美濃地方で製作された織部焼きである。燭台はろうそくをたてるものとして、特に儀礼のときに使われたが、本資料もその用途のために製作されたのであろう。台座の部分には花十字紋を描き、南蛮人の表情も柔和である。ラッフル襟の服装なども表現されており、当時の南蛮人の様子がよくわかる。

Candlesticks

A pair of ceramic candlesticks with Spanish and Portugal figures motifs.



10. キリシタン鋏

天草市立天草キリシタン館

鋏は江戸時代になり実用的なかたちとして量産される。日本製の鋏はさみを和鋏といい、これに対して西洋風のを洋鋏という。このキリシタン鋏は洋鋏にあたるが、胴に十字架を意匠している。キリシタンを象徴する十字架をモチーフとしたものは日用品などにはよくみられ、これもその例のひとつといえる。

Christian scissors

The scissors with cross motifs used by Japanese Christians.

III

弾圧とその果てに

天草島にも広く浸透していたキリスト教も、幕府の宗教政策の影響をうけることになる。特に天草島民も参加した島原・天草の乱によって、キリシタンたちの処遇は一変する。宗門改や絵踏などが徹底されるなど、表立ってキリスト教を信仰することは厳しく禁じられることになった。こうしたなかでも島民の一部はひそかに信仰を固持し、教えを守り続ける姿がここにあった。



天草四郎時貞を首領として起こった島原・天草の乱は、一揆軍が本渡で三宅藤兵衛を討ち取るなどの成果を挙げたものの富岡城の攻略に失敗すると、島原半島の原城に拠点を移すことになる。キリスト教を信仰の拠り所に籠城した一揆軍は、幕府軍に激しく抵抗するも、1638(寛永15)年2月末に鎮圧されることになる。この間、原城では幕府軍、一揆軍の多くの血が流れた。



11. 破提字子

天草市立天草キリシタン館

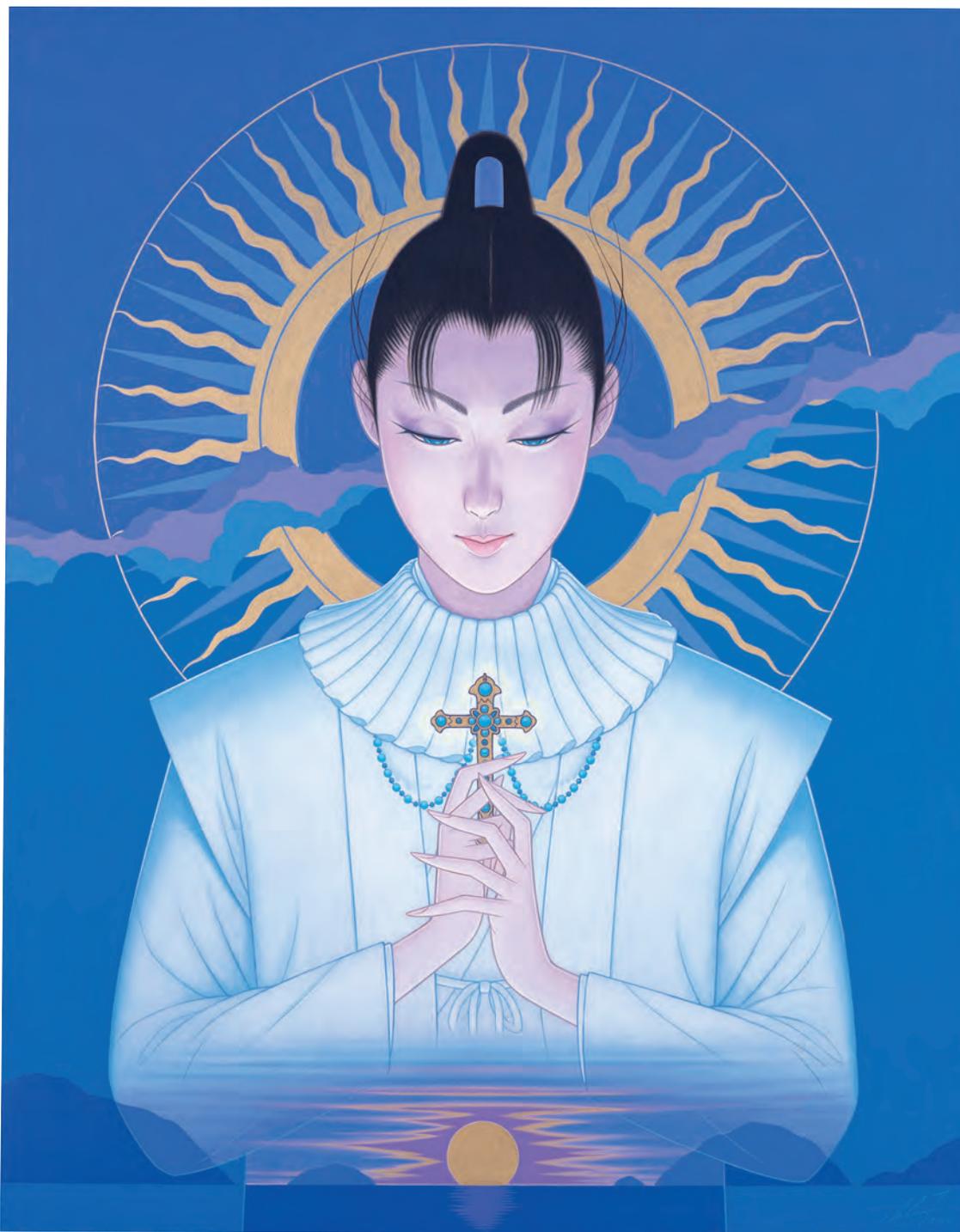
1620(元和6)年1月16日に元イエズス会のイルマンだった不干齋ハビアンが長崎奉行長谷川権六と長崎代官末次平蔵の依頼を受けて長崎で記した排耶書。提字子(デウスDeus)を論破するという意味で、キリスト教義を批判する内容である。唯一の体系的反キリシタン書で、幕末・明治期には復刻されるほどであった。破提字子はイエズス会に「地獄のベスト」と恐れられる書物であった。

Hadeus

Hadeus was written by a Japanese man who withdrew from Society of Jesus. On this book, he criticizes Christian doctrine.

コラム 排耶書の作成とキリシタン弾圧

江戸幕府による禁教政策が展開されるなか、長谷川権六は長崎奉行としてキリシタン弾圧を強行していく。「宗門人別改帳」の作成はもとより、キリスト教徒の搜索を厳しくおこなう。また、末次平蔵とともにキリシタンにより破却された長崎市中の寺院を復興するとともに、長崎の氏神、諏訪神社も再建する。そして長崎にあった教会施設を破壊し、キリシタン55名を処刑した元和の大殉教を指揮した。排耶書である「破提字子」を作成させるなど、キリシタン禁制の素地を作った人物が長谷川権六である。その後、長崎奉行に就任する水野河内守のときには絵踏がおこなわれることになるが、長崎の地からキリシタン弾圧の手法は発信されることになった。



12. 鶴田一郎氏「天草四郎 祈り」

天草市立天草キリシタン館

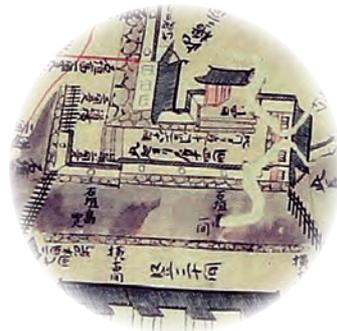
天草四郎時貞(益田時貞)は不詳なことが多い。小西行長の旧臣の益田甚兵衛好次の子で、出生は肥後国宇土郡江部村(熊本県宇土市)といわれるが、父の出身地である大矢野村(上天草市大矢野町)であったともいわれる。島原・天草の乱で一揆軍の首領として乱を指揮し、多くの領民を指導した。原城に籠城したときの一揆軍の精神的支柱として、また原城内において宗教的結合を保つ中心的役割を果たした。1638(寛永15)年2月28日の幕府軍の攻撃で四郎の首は討ち取られ、長崎でも晒される。なお、この作品は天草市出身の画家で、鶴田一郎氏(1954～)によるものである。美人画を得意とする鶴田氏らしく、女性らしさをもった繊細な天草四郎、そして郷里天草の自然の美しさがよく表現されている。

Portrait of AMAKUSA Shiro

Amakusa Shiroutokisada was born in Amakusa. He is famous as the leader of the Shimabara-Amakusa Rebellion. This painting was produced by Ichiro Tsuruta.



本丸部分拡大



三の丸正門

13. 肥後甘草富岡城図

天草市立天草キリシタン館

1637(寛永14)年10月25日、島原の民衆が幕府へ反旗を翻す動きをみせる。これは天草にも伝わり、天草四郎時貞(益田時貞)は一揆軍をとりまとめ、天草市本渡で幕府軍と激突する。富岡城番代であり、キリシタン弾圧を率先しておこなった三宅藤兵衛が一揆軍に打ち取られると、一揆軍はそのまま富岡城に攻め込む。しかし、本丸を攻略することができず、一揆軍は島原半島の原城に渡ることになった。この資料には堅固な富岡城の姿が描かれている。

Map of Tomioka Castle

The rebel army led by Amakusa Shiro attacked the Shogunate troops at Tomioka Castle in 1637.



炎上する城内



陣中旗がかかげられる本丸



幕府側の船

14. 有馬原城落城図

天草市立天草キリシタン館

原城に立て籠もった天草四郎時貞率いる一揆軍は幕府軍と激しい交戦を繰り広げる。多くの弾丸が行き交い、原城内ではキリスト教を精神的な拠り所として宗教的結合を強めた。オランダも幕府軍に加勢したこともあって原城の落城は時間の問題となる。1638(寛永15)年2月末の幕府軍総攻撃を受けると、乱は終焉を迎える。この資料には戦闘の様子など激しい幕府軍と一揆軍の攻防が描かれ、城内では火の手があがっている。また本丸には十字の旗が掲げられ、その手前には「陳佐左衛門」が配されている。陳佐左衛門は細川藩の家臣で、四郎の首を討ち取った人物ともいわれる。海上には幕府側の船も描かれている。

Map of Hara Castle

The rebel army led by Amakusa Shiro was defeated by the Shogunate troops at Hara Castle in 1638.



15. 天草四郎陣中旗

天草市立天草キリシタン館
 原品：国指定重要文化財

天草四郎時貞が島原・天草の乱当時に本丸でかかっていたものといわれる。この旗の中央部には聖杯を配し、そのうえには罪標付ラテン十字をつけたパンが描かれている。また、左右には羽をもつ天使が合掌した姿で描かれている。旗の上部には「LOVVADO・SEIAOSACTISSIM・SACRAMENTO」(いとも貴き聖体の秘蹟ほめ尊まれたまえ)とある。これは一揆軍として原城に籠城したなかで唯一生き残った山田右衛門作(洗礼名：ジョアン)の作品といわれる。山田右衛門作は、幕府軍との交渉役を務め、矢文の文章を作成していた人物である。この資料は十字軍やジャンヌダルクの旗とならんで世界三大聖旗とされる。

Flag of rebel army

A pattern of military flag of Amakusa Shiro's rebel army.





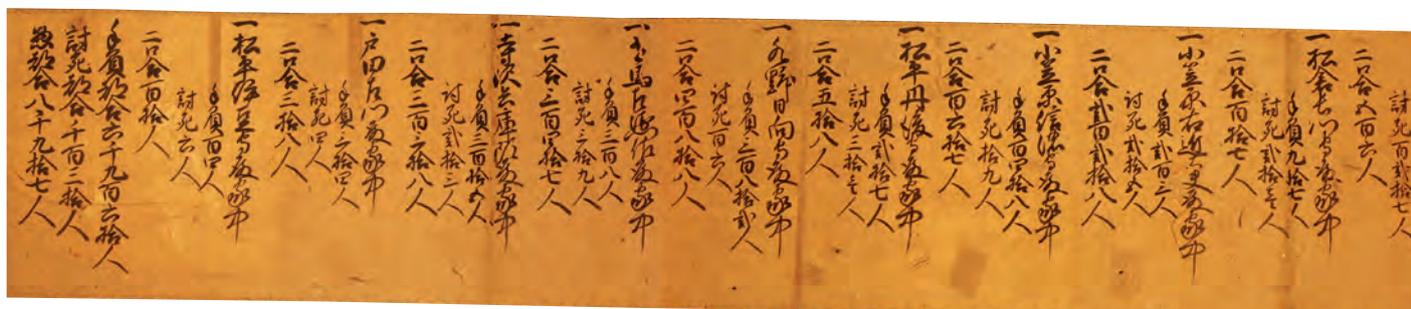
16. 島原陣図屏風(戦闘図)

財団法人秋月郷土館

島原陣図屏風は出陣図と戦闘図の六曲一双からなる資料である。幕府の命により西国大名の多くが、原城へ赴くことになるが、本資料を所蔵する秋月藩もそのひとつであった。筑前秋月藩初代藩主の黒田長興は、原城鎮圧に出陣し戦功をあげている。島原陣図屏風は秋月藩主黒田長元の命により斎藤秋圃が描いたものである。黒田長興の島原出陣から200年経ったことを記念して8年の歳月をかけて、1837(天保8)年に完成した。戦闘図には、1638(寛永15)年2月27日の原城総攻撃の場面を描き、本丸を攻め込む姿や繰り広げられる激しい戦闘の様相が克明に描かれている。

Rebellion at Shimabara

This folding screen shows the battle at Hara Castle in 1638.



17. 天草筒

天草市立天草キリシタン館

一揆軍は籠城にあたっていろいろな武器を所持している。島原・天草の乱を描いた「島原陣図屏風」などは戦闘の様子を伝える。この天草筒(鉄砲)も一揆勢が使っていたものといわれ、これを製作したのは種子島で鉄砲作りを習得したといわれる絹野信尚である。天草のキリシタンが戦闘で用いた天草筒によって幕府軍は多くの犠牲をうけることになった。

Amakusa-dutsu [gun barrel]

Konno Nobuyoshi produced a lot of guns for the rebel army.



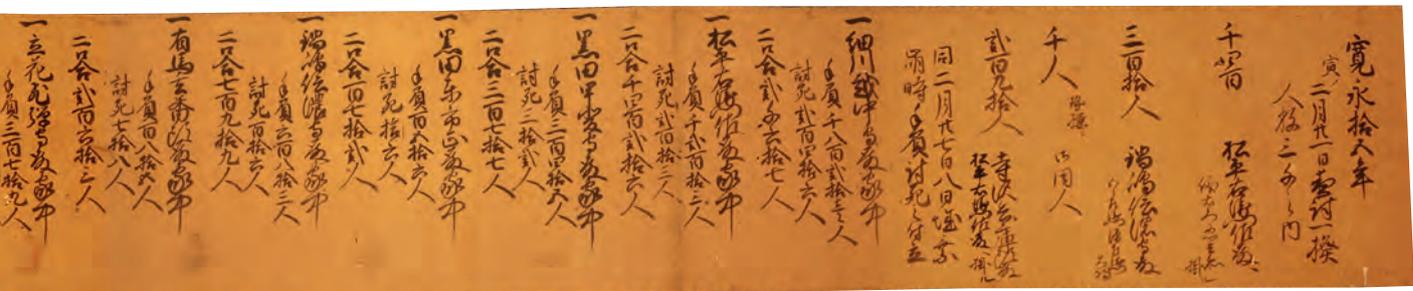
18. 筑紫薙刀

天草市立天草キリシタン館

筑紫薙刀^{なぎなた}は九州地方を中心に流通したもので、^{なた}鉞のような形状をしたものである。仲哀天皇の皇后である神功皇后が所持していたという伝承もある。この薙刀を振り回して幕府軍に抵抗したキリシタンの姿は「島原陣図屏風」などにも描かれている。

Chikushi-naginata [Hatchet sword]

Hatchet shaped swords were popular in Kyushu.



19. 天草・島原の乱手負討死一件

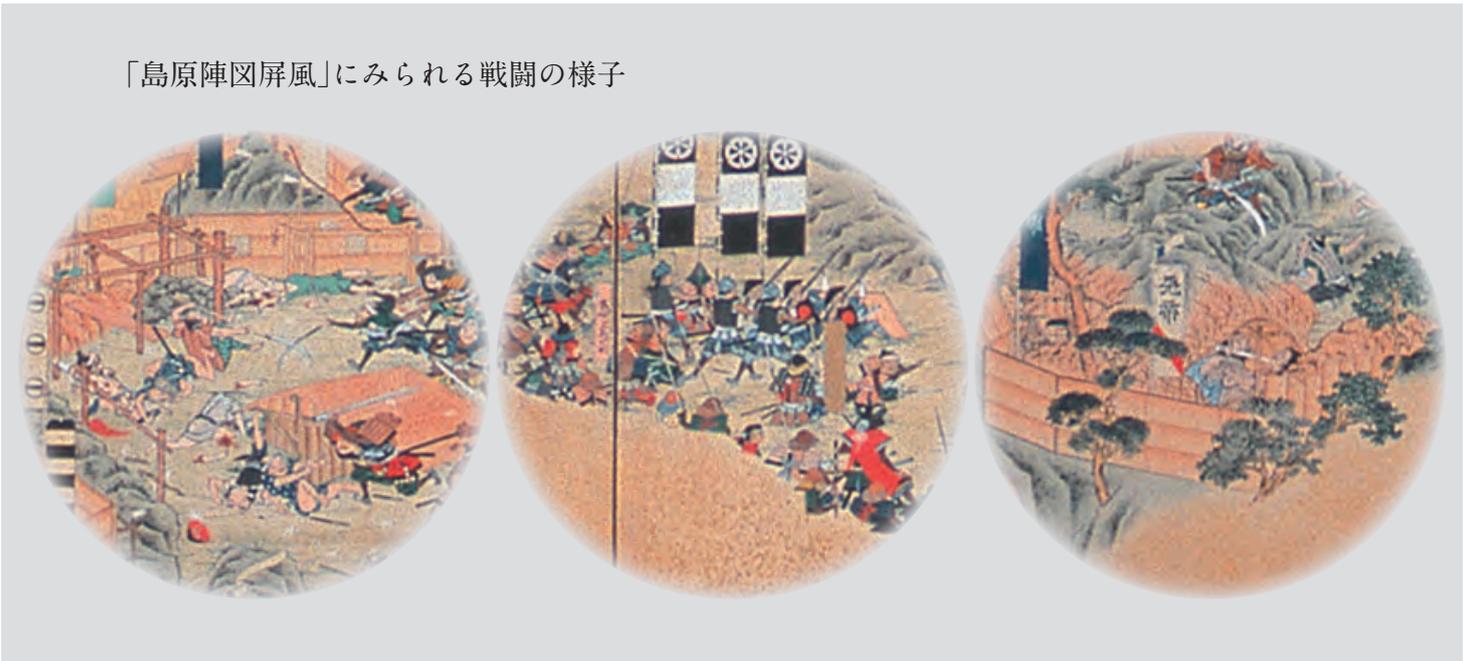
天草市立天草キリシタン館

1638(寛永15)年2月21日、長引く籠城のすえ食料などが欠乏していた一揆勢は、黒田・鍋島の陣中に夜襲をかける。この資料にはその時の一揆勢3000人の配分を冒頭で記している。これを機に城内の様子がわかってきた幕府軍は27日から28日にかけて総攻撃をおこなうことになる。この資料には総攻撃による幕府軍の手負いや討ち死の人数も収められており、当時の島原・天草の乱で繰り広げられた戦闘の実相がわかる。

Records of Amakusa - Shimabara Rebellion

Number of victims of the Amakusa-Shimabara Rebellion were recorded on this scroll.

「島原陣図屏風」にみられる戦闘の様子



Ⅲ-2

弾圧と信仰のはざま

島原・天草の乱が終結し幕府の国是として明確になった禁教政策により、各地で一層厳しい弾圧が展開されていくことになる。天草島でも初代天草代官である鈴木重成のもと、キリシタン弾圧がおこなわれていく。また絵踏の実施や宗門人別改帳の作成など、天草の地でも徹底した取り調べがおこなわれることになった。



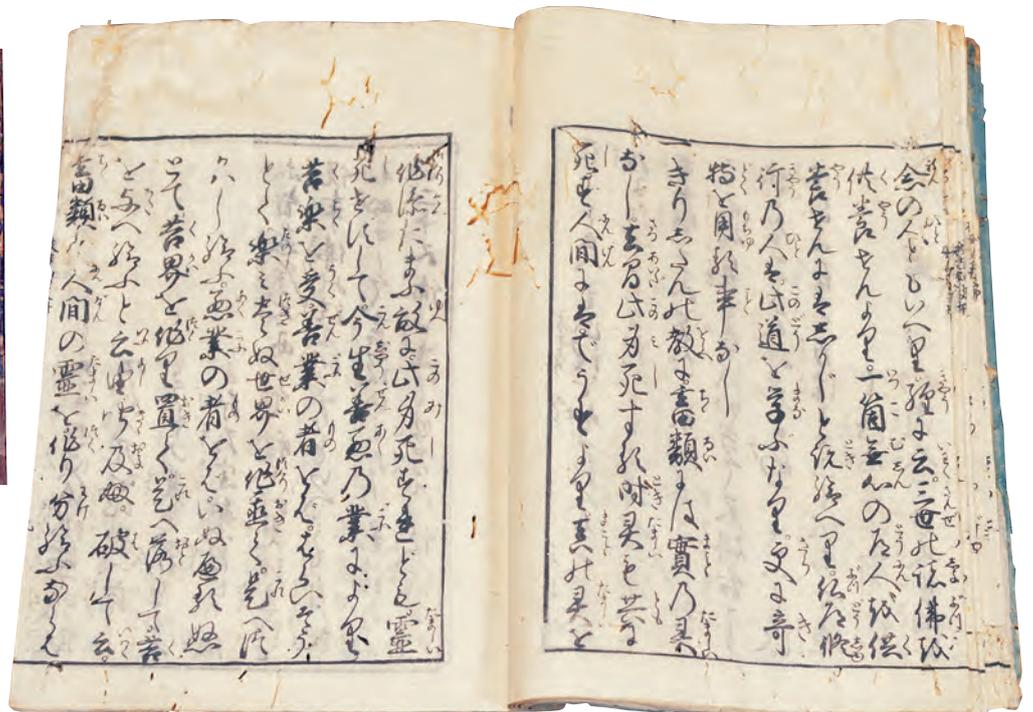
20. 鈴木三公肖像画

天草市立天草キリシタン館

鈴木三公(鈴木正三・重成・重辰)を描いたもの。鈴木正三(1579-1655)は徳川家に仕えた旗本で僧侶だった。『因果物語』や『破吉利支丹』などを記した人物として知られる。正三の弟にあたる重成(1588-1653)は島原・天草の乱にも出陣し、原城攻撃にも参加した人物である。天草の幕府直轄領化(天領)にともない、1641(寛永18)年に天草代官に任命される。乱後の人口減少や土地の荒廃を立て直すために区画や自治の再整備をおこなった。また、寺社復興のため兄の正三を天草に招き入れたともいわれる。重辰(1607-1670)は正三の子で、重成の養子となる。1653(承応2)年に重成の跡を継ぎ二代目の天草代官となる。寺沢氏旧領時代の石高減少(2万1000石)させることに成功し、1664(寛文4)年には京都代官に転じる。天草では乱後の建て直しをおこなった正三・重成・重辰を「三公」として祀っている。

Triangle of portraits of Suzuki

Suzuki Shozou, Shigenari, and Shigetatsu are a bonze and officers of the Shogunate. They are famous for restoring Amakusa after the Shimabara-Amakusa Rebellion.



21. 破吉利支丹(全)

天草市立天草キリシタン館

鈴木正三によって書かれた排耶書で、僧侶・武士・学者らの権力・知識階級を対象とした教理的内容の濃いものとなっている。筆者の正三は仮名草子の作者としてもよく知られる。自らは曹洞宗の僧侶であり、この立場からキリシタン教理を仏教的表現をもって提示し、キリシタンの仏教批判に答えるかたちで、仏教の功德が大きいことを示している。破吉利支丹は天草島の寺社に配布されたともいわれ、島原・天草の乱後の荒廃した状況のなかで、キリスト教にかわる精神的拠り所とすべくわかりやすく記されている。

Hakirishitan

Suzuki Shosan wrote this book to against Christianity after the Shimabara-Amakusa Rebellion.

コラム 天草の支配

中世の天草諸島を割拠していたのは天草五人衆とよばれる、志岐氏・天草氏・大矢野氏・上津浦氏・栖本氏である。1566(永禄9)年にアルメイダ神父を迎えたのは天草氏であった。その後、天正年間には小西行長の配下となるが、1589(天正17)年には天草国人一揆(小西行長・加藤清正との対立)が勃発する。さらに1603(慶長8)年には唐津領主寺沢広高が天草を治めることになる。島原・天草の乱が起こったときの領主は寺沢堅高だった。乱後は、山崎家治領となったが家治の移封にともない、1641(寛永18)年に鈴木重成が天草代官として就任する。一時私領となったり、島原藩や日田代官、長崎代官などの預かりとなるも、天草は基本的に天領として位置づけられた。天草はその地勢ゆえ異国船警備・抜荷取り締まりの要衝として、遠見番所が各所に設けられるなど、重要拠点とされた。

Ⅲ-3

島の信仰

キリスト教がアルメイダ神父によりもたらされてから、キリスト教は天草島民のなかで深く浸透していた。一度萌芽した信仰心は簡単には失うことはなかった。幕府による禁教政策のなかでも様々なものを隠れ蓑にして信仰していた。この形態も地域によって異なっており、“納戸神”として祀っていることもあれば、大黒天などを秘匿な信仰の拠り所としていた。



24. ロザリオとつぼ

天草市立天草キリシタン館
天草市指定文化財

「ロザリオの祈り」をする際、繰り返しの数を確認する小さな珠が結び目を連ねた数珠で、キリシタン用語でコンタツともいう。原城跡からもロザリオの珠が多数出土していることから、当時立て籠もった一揆軍はキリシタンであったことがわかる。この資料は、崎津の小高浜の海岸工事のときに壺に入った状態で発見され、鹿の角で作ったと思われる首飾りと十字架がついたロザリオが入っていた。ロザリオの素材や形状は地域によって様々で、種々アレンジされていることがわかる。また、この資料の発見時の状況からロザリオが大切に扱われていたこともよくわかる。

Rosary and pot

Rosaries were called "Kontatsu" by Japanese Christians. This rosary was made of antlers and found in this pot.



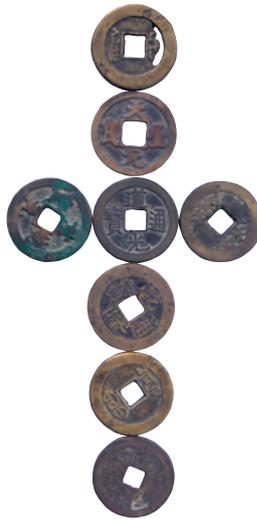
25. 切支丹燭台

天草市立天草キリシタン館

燭台はキリシタンの儀式では欠かせないものだった。そのデザインも南蛮人をあしらったものや十字架を鑄込んだものなどが取り入れられていた。意匠にこだわった燭台をキリシタンたちは使っていたことがわかる。

Christian candlesticks

Christian used candlesticks shaped of Westerner's figure or Cross in their ceremony.



26. 銭仏 壁仏

天草市立天草キリシタン館

いくつかの銭貨を結合させて十字架となし、これをクルスとみだてて信仰されていた。江戸時代、銭に仏を鑄込んだものが製作されていたが、これを参考にしてクルスに擬したものと思われる。また、十字架を容易に入手できなかったことから、このような工夫をしたのである。壁仏も同様であり、仏を壁にかけた仏式の信仰をまねたものと推測される。特に銭仏は天草島で浸透していたようで、天草崩れのときに数多く没収されている。それも銭一文・二文・四文などさまざまで、天草の人々はこれらをデウスやマリヤとみだてて信仰していたことがわかっている。

Cross of coins/Wall Buddha

Cross of coins and wall God were made as objects of devotion in Amakusa.



27. 潮隠しクルス

天草市立天草キリシタン館

天草灘の洞窟にあったとされるキリシタン遺物で、石に十字架がはっきりと刻まれている。祭りに使われていたものと思われ、通常は砂で覆われ十字架が隠されている。干潮時になるとこの砂がはらわれ、十字架があらわになる。擬似信仰であるマリア観音などとは異なる天草島でのキリシタン信仰のひとつとして興味深い。

Cross hidden in the tide

The stone with Cross was engraved in the cave of Amakusa. It was used when they performed ritual.

28. 聖水鉢

天草市立天草キリシタン館

潮隠しクルスの近くに置かれていたものとされる。聖水は聖職者が儀式書に従って祝福した水で、これに塩をまぜることもあった。祝福するときに散水(灌水)したり、個人的な祈りをはじめるときに使われた。聖水は聖霊の働きによる霊的な清めにつかう道具であった。聖水鉢は教会施設におかれていることが多く、この聖水鉢には蓮華文があらわれている。

Bowl for holy water

The holy water is blessed by the priest and sometimes they mix tide in it. This bowl was kept with the cross hidden in the tide.





29. 十字入佛石

天草市立天草キリシタン館

天草島の住民のなかにはひそかに十字を刻んで祈りをしていたものがいた。本資料も上部にかすかな十字が刻まれており、これをクルスにみたてて信仰していたのではないかとわれている。

Image of Buddha carved with cross

The cross was slightly carved on the stone image of Buddha.



30. 十字架

天草市立天草キリシタン館

十字架は、磔の刑具という史伝的枠組みを超え、キリスト教信仰のアイデンティティの拠り所となった。初期キリスト教時代から崇敬の対象となり、キリスト教世界に広く浸透した。数多くの十字架が海外から持ち込まれるとともに国内でも製作された。

Cross

Crosses were also kept by Japanese Christians as objects of faith.



31. IHS紋入り聖杯

天草市立天草キリシタン館

胴に「I. H. S」をあてがった聖杯である。通常、聖杯(calix)は祭器具「カリス」ともいわれ、ミサのなかでぶどう酒を聖別するための祭具として、パテナ(聖体皿)とともに重要なものとされた。形状からぶどう酒を注いだものとは考えにくい、潜伏キリシタンたちが信仰するなかで、なんらかの用途でつかわれていたものと思われる。

The holy Grail with IHS emblem

The emblem of "IHS -Jesus Hominus Salvator" is carved on the Holy Grail.



32. 隠し十字佛

天草市立天草キリシタン館

仏像の台座に支柱をのぼし、その途中で輪をあてがっている。台座と仏像本体が分離しており、台座の支柱と輪を十字架にみたくて信仰していたようである。一見すると光背を帯びた仏像であり、台座を取りはずさなければ十字架があるとはわからない。キリシタンであることを隠して信仰していた様子がわかる。

Image of Buddha carved with cross

Hidden Christian people kept this stone image of Buddha as object of devotion.



33. 鏡仏

天草市立天草キリシタン館

鏡に神が宿るといのは古くから日本に定着していた概念である。神鏡(八咫鏡)などはよく知られている。この鏡仏もこれに倣ったものであり、潜伏キリシタンたちが信仰のよすがにしていたもののひとつである。また、丸い鏡であれば「丸や」(マリヤ)として信仰しているが、なかには仏の名前もわからぬまま信仰しているものがいた。南蛮国からの鏡というだけで信仰の拠り所としていたのである。

Bronze mirror

Round mirrors were considered as the Virgin Mary by Japanese Christians.



34～35. 納戸神

天草市立天草キリシタン館

納戸(衣類などを納めておくところ)に祀られた神には、西日本では恵比寿や大黒天などがあった。地域によっては田んぼの神さまとして信仰されているところもある。キリシタンの場合は聖像画などが祀られたが、これは江戸時代の禁教下において秘密裏に信仰を保持したかくれ信仰に由縁する。天草では鏡を納戸神として祀っていることがわかっている。

The holy mirror enshrined in the altar

Under the decree of prohibiting Christianity in Edo period, hidden Christian people hid objects of faith in the storage room.



36. 大黒天像

天草市立天草キリシタン館

大黒天は仏教の守護神とされ、七福神のひとつとされる。日本の大国主命と集合して多くの人から信仰された。大黒天も納戸神として祀られることが多かった神のひとつである。大黒天は潜伏キリシタンに「丸や」(マリヤ)として信仰されていたことが天草崩れの供述調書からわかる。

Small statue of *Daikokuten*

Daikokuten is one of storage room's gods and it was considered same as the Virgin Mary by hidden Christians.

コラム 天草崩れ

文化年間に天草崩れという多数の潜伏キリシタンが検挙される事件がおこる。1805(文化2)年に今富村で古い異仏が見つかったことが契機となったものだが、5205人という多くの天草島民が取り調べをうけることになる。このなかで多くの信仰物が没収されており、大江村では銭仏や丸鏡仏、土人形などさまざまなものが含まれていた。また、日常生活の様子も調べられ、墓参りのときは「あんめんじんす」と唱えるものの、神社ではその神の名前を、寺院では南無阿弥陀仏と唱えているものもいたことが明らかになっている。結局、彼らはキリシタンとしては処罰されることはなかった。それは、幕府から「心得違」をしていたものたちと判断されたためである。キリシタンではなく普通とは異なる宗教「異宗」を信仰していた者たちとして処分されたのであった。

IV

海外交流の地天草

天草の地には古くから多くの文物が行き交っていた。今日の発掘成果からみても中国の白磁や青磁を中心に、ベトナムの青花などもある。中世天草の地でどのような交流がおこなわれていたのか、発掘遺物からその姿を明らかにする。



IV-1

浜崎遺跡出土遺物

天草市にある浜崎遺跡は、12～14世紀頃の遺物が数多く出土する中世前期の遺跡で、地頭天草氏に関わる生活遺跡である。龍泉窯青磁、福建系白磁、景德鎮系白磁・青白磁、同安窯青磁などはこれを代表するものである。なかには、墨書陶磁もみつかると、中世天草の交易の様子を知ることができる。



37. 福建系白磁

天草市教育委員会

White porcelain of Fujian



38. 同安窯青磁

天草市教育委員会

Celadon of Tong'an



39. 景德鎮系白磁・青白磁

天草市教育委員会

Jingdezhen white porcelain/blue porcelain



40. 龍泉窯青磁

天草市教育委員会

Celadon of Longquan

IV-2

棚底城跡出土遺物

天草上島南側の城館で、上津浦氏と栖本氏の係争地として知られる棚底城跡は、16世紀に隆盛を極めていたと考えられている海城である。主郭を中心として合計8つの郭から成っており、中世城郭としては熊本県内最大級の木造建造物であった。城跡からの出土品の半数は、貿易陶磁で占められていることから、九州城館の海を越えた交流をうかがうことができる。



41. 漳州系青花

天草市教育委員会

Zhangzhen type Blue-and- white



42. 景德鎮系青花

天草市教育委員会

Jingdezhen type Blue-and-white



43. 景德鎮系青磁

天草市教育委員会

Jingdezhen type celadon



44. ベトナム産青花

天草市教育委員会

Vietnamese Blue-and-white

IV-3

河内浦城跡出土遺物

河内浦城は中世の天草五人衆のひとり、天草氏の代々の居城である。城の詳細は、ルイス・フロイス著『日本史』でも紹介されている。ここから出土されるものは、中世天草氏の交流をしめすもので、青磁や白磁など多数発見されている。なかには、ベトナム産の大皿や中国産の播鉢もみられ、発掘遺物から天草氏の海外交流の実像があきらかになる。



45. ベトナム産鉄絵大盤

天草市教育委員会

Vietnamese underglaze plate with iron brushwork



46. 中国産播鉢

天草市教育委員会

Chinese earthenware



47. 青磁

天草市教育委員会

Celadon

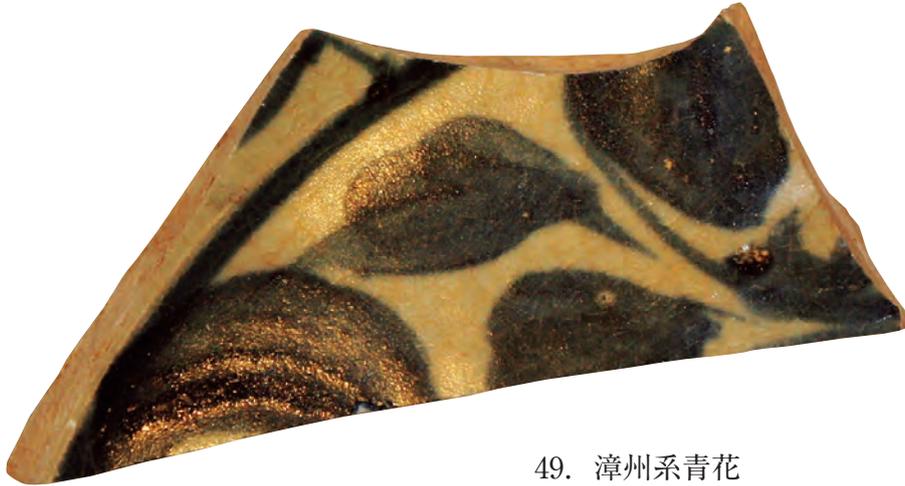


48. 灰色磁器皿

天草市教育委員会

Gray porcelain dish

天草下島北東の内陸部、内野川沿いに立地する城郭の三川城跡からはほかの遺跡からはみられない色彩の鮮やかな陶磁器が発掘されている。そのなかには大友館からしか出土されていない「金欄手」の碗の破片や、南蛮貿易との関連性のある「華南三彩」などがある。志岐氏の南蛮貿易の様子を伝えるとともに、これらは内陸に運ばれた希少な例として知られている。



49. 漳州系青花

天草市教育委員会

Zhangzhen type Blue-and-white



50. 華南三彩角瓶

天草市教育委員会

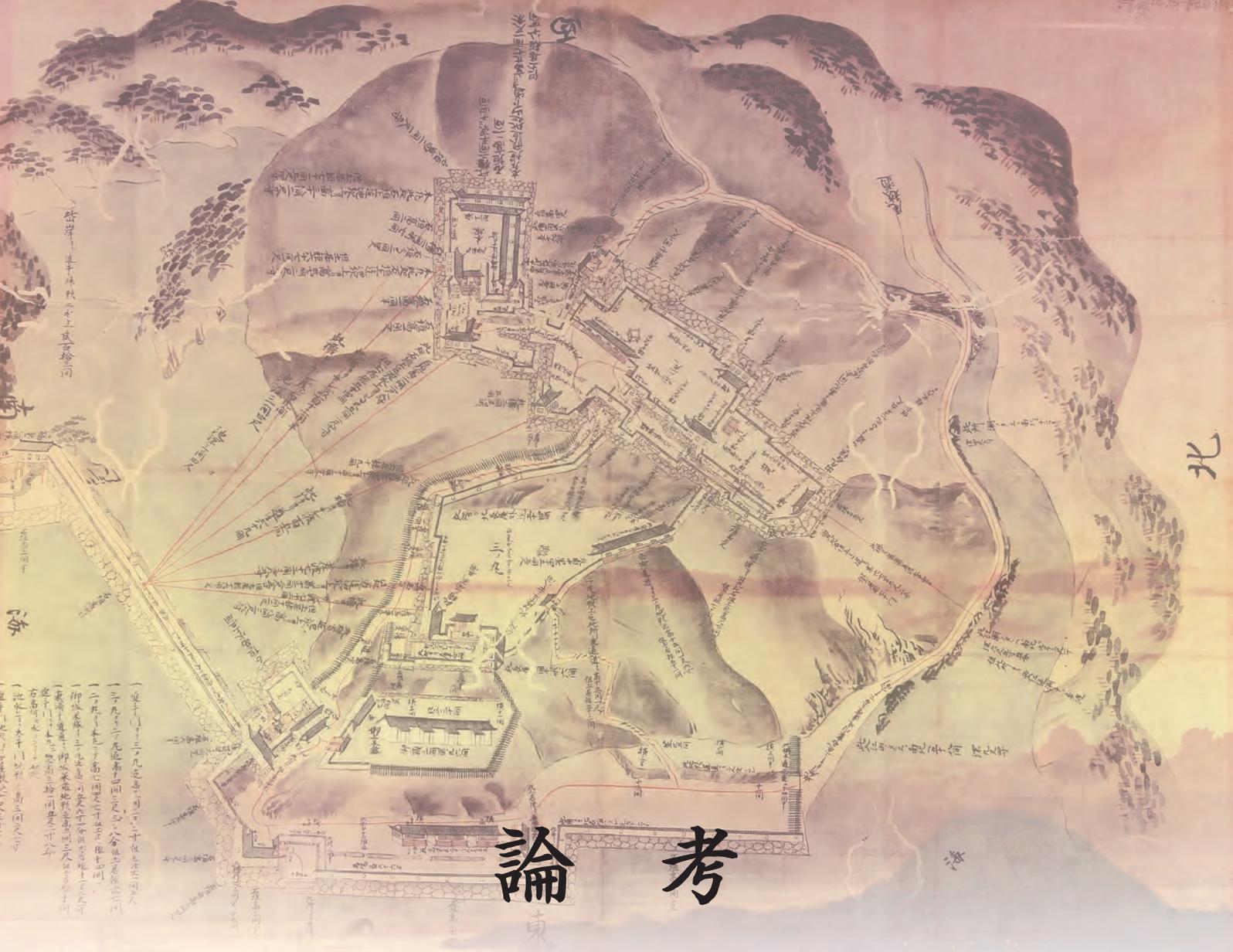
Color glazed square bottle of southern China



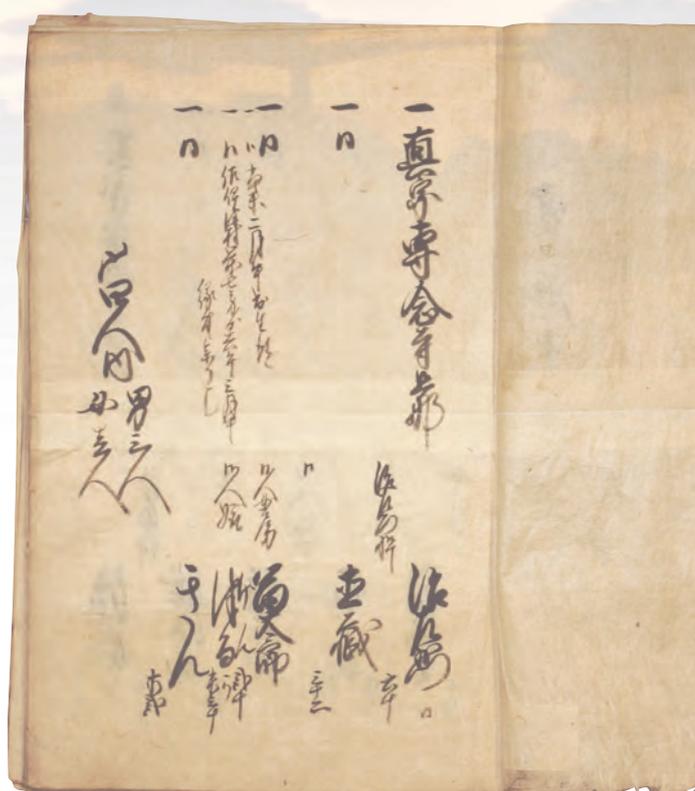
51. 景德鎮系緑地金欄手碗

天草市教育委員会

Jingdezhen type green glazed bowl



考論



海の領主「天草五人衆」と天草へのキリスト教伝来

天草市教育委員会

中山 圭

はじめに

1549年、初めて日本にキリスト教を伝えたフランシスコ=ザビエルは、都での布教を求めて1550年8月、1年ほど逗留した鹿児島を後にして、平戸へと旅立った。

天草は、薩摩と平戸を結ぶ九州西岸航路の中間に位置しており、ザビエル一行は平戸への航海の途中、船上から天草の島々を眺めたことであろう。しかし、先を急ぐ彼らが天草に立ち寄ることはなく、天草とキリスト教との邂逅には、いましばらくの時を要した。

修道士ルイス=デ=アルメイダが天草下島の志岐に到来しキリスト教を伝えたのは、1566年になってからであり、ザビエル一行のニアミスから実に16年を経過していた。天草の地理的な位置を考えれば、むしろ遅い伝来という印象さえ抱かせる。

しかし、これ以後、天草ではキリスト教が大いに浸透し、1592年には60以上の教会と、33000名以上の信徒を数えるまでの活況を呈することとなった。[高瀬 2001]

このように戦国末期の天草は、国内有数のキリスト教浸透地域となった。本稿では、その経緯を概略していきたいが、それには戦国時代の天草に分立した在地領主「天草五人衆」の存在が欠かせない。

1. 海の領主「天草五人衆」

天草の縄文時代遺跡では、動物の骨・角で作った大型の釣針、あるいは石や貝で作った銚が数多く出土し、生活の中で大きめの魚類を獲物としていたことがわかっている。古墳時代には、土器に汲み上げた海水を入れ、煮沸して食塩を生産する土器製塩を行っていた。天草の人々はこうして、いにしえより海の恵みを糧として生きてきた。天草を取り巻く海洋は、その暮らしの源泉であったといえよう。

有史以前の状況に比べると、中世天草の人々がどのように海の恵みを生活に生かしてきたかは、あま

り定かではないが、眼前に広がる豊饒の海から、なお、多くの恵みを与えられていたものと考えられる。それは直接的な恩恵にとどまるものではなく、海を介した交易も大きな恵みであったといえよう。中世には船舶交通が発達、地域間交易が盛んとなり、大きな利潤をもたらした。それは全国的な傾向であったが、特に天草は、中国大陸と東シナ海を隔てて直接往来できるという地理的環境によって、活発な交易を行っていたと考えられる。それまで日々の糧をもたらす一方で、陸同士の交流を隔てる存在であった海洋は、一転して中世には、新たな交流を演出する道として、島嶼に広がりを与えたのである。

中世の天草を治めた領主たちは、地頭職として天草に赴任してきた人々が主で、諸島の各地に任じられ、やがて国人領主となっていった。彼らは国人一揆を結び、周辺諸国からは「天草一揆中」として認識されていた。個々に突出した力を持たないため、連合体となることで、周辺勢力との外交を有利に運ぶ意図があったと思われる。一方で、天草一揆中は島内で抗争を繰り返したが、数氏が淘汰、併合されるにとどまっている。結果として16世紀中頃に残った天草氏・志岐氏・上津浦氏・栖本氏・大矢野氏の五家のことを「天草五人衆」と呼び、内外に認知されることになる。

五人衆は強固な生産基盤と軍事力を持たない島嶼領主であったために、上記のようにその経済は交易によって成り立っていた部分が少なくないと思われる。本図録に掲載されている輸入陶磁器類の多くは五人衆の城郭から出土したもので、ベトナム産青花や華南三彩などは五人衆が広く東アジアと交易によって繋がっていたことを想起させる資料である。列島縁辺に在った天草五人衆の眼差しは、海の外へ向いていたといっても過言ではない。

キリスト教の導入もまた、根本的には東アジアとの海を介した交流の延長線上に位置づけられるところであるが、その動機と時期が五人衆ごとに非常に多様性に富み、これが天草におけるキリスト教伝来の特徴である。

2.天草五人衆とキリスト教

天草五人衆の中で、最も早くキリスト教と接触したのは天草北西部を拠点とする志岐氏であった。五人衆中最大勢力である天草氏も早くから宣教師の派遣を求めていたが、当主志岐麟泉が島原半島の有馬氏と親密であったため、先に志岐へ宣教師が到来することとなった。1566年10月イエズス会修道士ルイス＝デ＝アルメイダは、海峡を隔てた対岸の口之津から天草下島の志岐に渡り、志岐麟泉に洗礼を授けた。麟泉は、養子諸経の兄にあたる大村純忠が、1563年に大名として初となる洗礼を受けた際に、キリスト教に反発する家臣による叛乱が発生していた例から、自身の改宗を内密に行いたい旨を求めている。

ともあれ、麟泉は受洗によりドン＝ジョアンと称するようになり、教会堂も造られた。キリスト教が志岐に伝えられてから僅か2年の1568年には領内のクリシタンの数は1000名を数え、またたく間にキリスト教が広まったことが見て取れる。このような布教の盛り上がり背景に、同年、日本布教長コスメ＝デ＝トルレスやガスパル＝ヴィレラなど主だった宣教師が志岐に参集し、布教方針を定める会議が行なわれた。この宣教師サミットとでも言うべき会合は、1570年にも行なわれ、この時にはトルレスの後継者としてフランシスコ＝カブラルが南蛮船で志岐に来訪し、以後、日本布教長となる。この船は天草に最初に来航した南蛮船である。

短期間のうちにクリシタンの数が増え、相対的に国内布教上における志岐の重要性も高まったが、ほどなく志岐麟泉は棄教した。九州諸侯の多くは、ポルトガルとの交易によって産み出される利潤を自領に誘導するためにキリスト教を庇護したと考えられるが[五野井 1994]、志岐麟泉の場合はその典型例といえよう。

志岐の棄教と前後するが、1569年には天草氏の本拠河内浦へアルメイダ修道士が布教に訪れる。天草氏もまた、志岐氏と同じく早くから宣教師の派遣を望んでいたが、宣教師の数が不足しており先延ばしになっていた。当初の河内浦での布教で、執政官(家老か)を始め約700人が洗礼を受け、ポルトガル船を受け入れる港として崎津が定められたところまではよかったが、その後、大村などの先例と同様に、家中での内紛を誘引してしまう。当主天草尚種と執政官ドン＝リアンによるキリスト教庇護に反発し、尚種の二人の兄弟である天草刑部大輔と天草大和守がクーデターを起こした。兄弟は久玉城、河内浦城を占拠し、尚種は領内第二の城である本渡城への退去を余儀なくされ、天草氏はキリスト教を巡って分裂する憂き目にあった。後にこそ全島クリシタンとなる天草でも、その導入当初は混迷の度合いが強かったことがうかがい知れる。

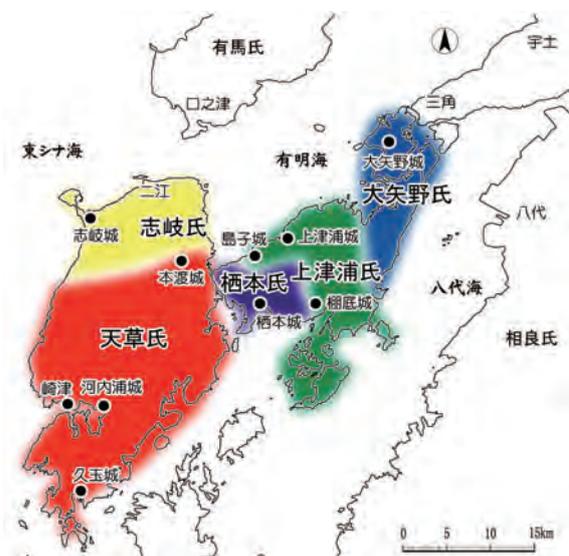
しかし、天草家中での内紛が収束した後は、河内

浦を中心に着実にキリスト教が広まることとなった。以後、1587年までの十数年は、ほぼ天草氏が単独で天草での宣教を牽引したと言ってよいであろう。五人衆のうち、内海の沿岸部に本拠を持つ上津浦・栖本・大矢野は未だキリスト教との接触を図っていない。天草五人衆の中でキリスト教への導入に対し、相当に温度差があったといえる。東シナ海に面した志岐・天草氏が交易の利潤を目当てとして積極的に導入に動き、一方で、内海沿岸3氏の食指が動かなかった理由は、地勢上の要因や宗教観に原因があるのだろうが、詳しくは判明していない。

1571年には宣教師カブラルが尚種に洗礼を授けドン＝ミゲルとなり、1576年には嗣子天草久種も受洗し、ドン＝ジョアンとなった。1579年には領内の天草(河内浦)、本渡の二箇所司祭館があり、前者に司祭2名・修道士1名、後者に司祭1名・修道士1名が常駐している[松田監訳 1991]。翌1580年、天草領南部の久玉にも司祭館が建設されている。天草領内では年々、信仰が広がっていたことが理解されよう。

当主が棄教し、積極的な保護が図られなくなった志岐においても、民衆レベルでの信仰は継続していた。1582年段階で司祭は駐在していないものの数箇所の教会堂と多数のクリシタンがいたとされる[松田監訳 1991]。

天草五人衆は相良氏を介して間接的に大友氏に従属する姿勢をとっていたが、1578年に日向耳川の合戦で島津氏が大友氏を破ってからは、島津氏に接近、翌1579年より島津氏の幕下に入ることになる。五人衆は天草一揆中の頃から、周辺勢力の趨勢を見通すことに長けており、菊池氏・相良氏・大友氏など時機に応じて最も勢いのある勢力に率先して帰順することで自治権を保持、島への武力侵攻を予防していたようである。このような内政干渉を忌避するための処世術は、私貿易等の遂行に必要な政策と思われ、結果、島津支配下における天草氏領内での、さらなる



キリスト教の広がりには有効な政策と考えられる。

北上を急ぐ島津氏は天草の直接支配は行わなかったが、代わりに五人衆には軍役が課せられ、各地を転戦することとなった。1587年、五人衆は島津氏に従って豊後の城に籠城していた。当初、島津優勢だった合戦も、秀吉軍が大友の援軍として九州に上陸してからは形成が一転し、この頃には既に島津軍も大半は退却し、五人衆は城に孤立した窮地にあった。寄せ手の大友氏武将、志賀親次は洗礼名をドン=パウロというキリシタン武将で、籠城側にドン=ジョアン天草久種がいるのを知り、同じキリシタンの誼で久種のみを助けることを申し出た。久種はこの申し出に対し「天草五人衆は一心同体の間柄であるので、自分だけが助かることはできない」と返答したところ、親次は久種に免じ五人衆全員を解放した。この逸話は、キリシタンの愛情の深さを伝える美談として報告されている。

志賀親次の厚意は、天草の宣教に大きな影響を与えた。解放された五人衆は自領に戻り、まず、これまで導入に積極的でなかった大矢野種基が、キリシタンの親愛に感銘を受け、その年のうちに家臣とともに入信し、ドン=ジャコベを名乗ることとなった。続いて、翌年に栖本鎮通・親高親子も多くの領民とともに受洗する。すでに隠居していたと考えられる鎮通はドン=バルトロメウ、若き当主親高はドン=ジョアンと洗礼名を授かり、家臣・領民2200名以上の人々が信者になったと伝えられる[松田・川崎訳 1979b]。

大矢野・栖本氏のキリスト教保護は、既に秀吉によるバテレン追放令が発せられた後にあたり、時勢的に改易・取り潰し等の危険性をはらんでいた。それでもなお、改宗に至った経緯からは、伝来期頃の交易利潤を求めてのものではなく、領主の純粋な信仰願望から発したものと評価されよう。

1588年、肥後国は小西行長・加藤清正が分割して統治することとなり、天草五人衆は行長の与力となった。しかし、旧来同様の自治領主としての自負が強く、行長の宇土城普請への協力を拒否、翌年、小西・加藤連合による天草征伐を招くこととなった。天正天草合戦と呼ばれるこの戦いでは志岐氏の志岐城、天草氏の本渡城が落城し多数のキリシタンが命を落とした。志岐氏は天草を追われたが、天草氏は本渡城落城後に降伏したため、かろうじて本拠の河内浦城までの侵攻には至らなかった。天草の島々は行長の直轄地となるが、志岐氏を除く五人衆はそのまま当地に置かれた。志岐には行長名代として日比屋了荷(ドン=ヴィセンテ)が配置され、また有明海沿岸の島子城にもキリシタン武将が置かれた。姓名不詳のこのキリシタン武将が、五人衆のうち、未だキリシタンでなかった上津浦氏の改宗を促し、1590年に上津浦種直は領民3500人とともに受洗してドン=ホクロンとなっている[松田監訳 1987]。天草では最後にキ

リシタンが伝わった地域となるが、これを証明するかのよう、上津浦城にほど近い正覚寺の地下から慶長11年(1606)の年号とIHSの銘を刻んだカマボコ型キリシタン墓碑が発見されている。

小西行長の統治下で、五人衆はそれぞれにキリシタンとしての役目を果たしたと考えられる。特に現地にとどめ置かれた点は、領民の教化に五人衆の存在が必要であったと行長が考えたからであろう。文禄・慶長の役において五人衆は小西行長の武将として渡海しているが、秀吉他諸大名の関心が朝鮮半島へ向いていたため、天草ではなおキリスト教が浸透したものと考えられる。海に隔絶され秘匿に適した場所であることから、河内浦には加津佐から神学校コレジョが移され、教理書など多数の出版物が印刷された。志岐には画学舎が設けられ、聖像画やパイプオルガンなどが製作されたといわれる。序文のように3万を超える島民がキリシタンとなり、行長と五人衆の下で天草は文字通りキリシタンの島となった。

おわりに

天草のキリシタンというと、教科書に出てくる天草四郎と天草島原の乱のイメージが先行しがちである。しかし、それに至る素地を形成した存在として天草五人衆が果たした役割は決して小さなものではなく、天草のキリシタン史のみならず日本キリシタン史を理解する上でより広く周知されるべき存在と考えている。それには、今少し五人衆の具体像を提示する資料の出現が望まれるところである。近年、各地で考古学的なキリシタン遺跡・遺物の発見が相次いでいるが、天草五人衆時代の遺構・遺物はほとんど発見されておらず、ヴェールに包まれている。今後、進捗するであろう五人衆関連遺跡の調査で、少しずつでもその姿が明らかになることが期待される。

参考文献

- 新井トシ訳1945『グスマン東方伝道史』下巻 養徳社
- 五野井隆史1994『日本キリスト教史』吉川弘文館
- 高瀬弘一郎2001『キリシタン時代の文化と諸相』八木書店
- 高野茂2007『第二部 後期中世社会と大矢野』『上天草市史 大矢野町編2 中世 大矢野氏の活躍』上天草市史編纂委員会
- 鶴田倉造1991『第二章 中世 第七節 キリシタン伝来』『本渡市史』本渡市史編さん委員会
- 松田毅一・川崎桃太訳 1979a『フロイス日本史9 西九州篇Ⅰ』中央公論社
- 松田毅一・川崎桃太訳 1979b『フロイス日本史11 西九州篇Ⅲ』中央公論社
- 松田毅一監訳1987『一六・七世紀イエズス会日本報告集』第Ⅰ期第1巻 同朋舎
- 松田毅一監訳1987『一六・七世紀イエズス会日本報告集』第Ⅰ期第2巻 同朋舎
- 松田毅一監訳1991『一六・七世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第6巻 同朋舎
- 松田毅一監訳1992『一六・七世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第5巻 同朋舎
- 松田毅一監訳1998『一六・七世紀イエズス会日本報告集』第Ⅲ期第4巻 同朋舎

近世初期天草とキリスト教の状況

天草市立天草キリシタン館
松本 博幸

はじめに

永禄9年(1566)天草にキリスト教が伝来して以降、天草はキリスト教信仰の盛衰をみた。中世末期、小西行长領となって以降はノビシャド、コレジオの両教育機関を移設、画学舎を設置し、イエズス会の活動拠点となり天草キリスト教全盛期を迎えた。天草でコンフラリアが初めて組織されたのもこの時期である。関ヶ原によって小西行长が滅んだ後、慶長6年(1601)天草領主となった寺沢氏のもとでは、慶長18年12月(1614年1月)の禁教令以後弾圧が本格化され、天草島原農民たちによる天草島原の乱へと発展する。寺沢期における天草の一次史料の少なさは既に指摘されているところであり、当該期の天草は依然不明な点が多い。本稿では、天草島原の乱へと帰結する寺沢期の天草の状況について、改めて整理し略述してみたい。

1. 近世初期天草における宣教師とキリシタンの動向

天草領主寺沢広高は当初イエズス会士ジョアン・ロドリゲスと徳川家康の関係を考慮し、また、弾圧による農民の逃散を懸念したためキリシタンに比較的寛容であった。天草の司祭館破壊を命じたが志岐と上津浦の2箇所は残したため、パードレは志岐・上津浦に留まり布教が行われた。慶長18年12月(1614年1月)の禁教令以後は本格的に潜伏活動せざるを得ない状況となったが、離島という地域的特性とキリシタンが多い島であったため多くの宣教師が潜伏、または巡廻来島して信者の司牧と世話に当たっていた。

天草で活動した宣教師の主だった人物を表1に示した。1614年の宣教師追放までは、志岐と上津浦の司祭館には専任パードレ及びイルマンが各1名ないし2名おり、信者の世話と司牧を行っていた。また、慶長11年(1606)から慶長16年(1611)まで一時的にはあるが、廃止されていた崎津の司祭館も復活し、パードレ・イルマン各1名が常駐した。天草でパードレが

最後に確認されたのは後述するように寛永10年(1633)上島の赤崎村で捕縛された時と同年志岐で捉えられた斉藤パウロであり、以後、宣教師不在の時代となる。

禁教下において信仰維持に大きな役割を果たしたのはコンフラリアであるが、慶長元年(1596)志岐にビセンテ兵右衛門が初めてコンフラリアを組織して以降、徐々に信仰の組織は増加し元和3年(1617)のコウロス証言書では上島の大矢野・上津浦、下島の内野・二江・坂瀬川・富岡・志岐・都呂々・下津深江・小田床・高浜・大江・崎津・今富の村々にまで拡大していた。他地方ではコンフラリアが大小の組を持って組織されている例もあるから、天草においても前述の証言にある村以外に、彼らに属する小組があった可能性も否定できない。寛永3年(1626)ジョアン・ロドリゲス・ジランは大矢野にイグナシオの組が拡大していると報告している。

天草のキリシタン数の推移は、16世紀末には約30000人と言われたが、慶長8年(1603)には13000～14000人、元和9年(1623)には約1000人にまで減少しているとイエズス会によって報告されている。

2. 迫害の状況

天草におけるキリスト教への迫害は、寺沢領となった当初から行われていたが、大きく3つをあげることができる。第一は、寺沢支配となって3年経った慶長9年(1604)のことで、志岐と上津浦の司祭館以外を破壊させ、島内にあった十字架を撤去させた。第二に、慶長19年(1614)に、志岐司祭館のガルシア・ガルセス、上津浦司祭館のマルコス・フェラロが追放され、志岐教会の看房荒川アダムは富岡で拷問の後斬首され海に沈められた。第三は寛永6年(1629)、寺沢広高の命を受けた富岡城番代三宅藤兵衛によって大規模なキリシタンの取締りが行われた。寛永6年の迫害における重要な名前をいくつか挙げてみよう。「崎津のキリシタンの頭」で海に沈められたミゲル治部左衛門は、コウロス証言書に署名のある崎津

ガルシア・ガルセス	Pr	1600～1614	志岐司祭館、マカオに追放
ジョアン・デ・フリアス	Pr	1600～1605、1606～1611	志岐司祭館、崎津司祭館
マルコス・フェラロ	Pr	1600～1614	上津浦司祭館、マカオに追放
フランシスコ・パシェコ	Pr	1615～1618	有馬に潜伏し、天草各地を巡廻
ジョアン・パプチスタ・ゾラ	Pr	1613、1615～1618	有馬に潜伏し、天草各地を巡廻 1613は上津浦の司祭館
ジョアン・ダ・フォンセカ	Pr	1615～1618	有馬に潜伏し、天草各地を巡廻
ジュリアノ・デ・中浦	Pr	1615～1618	有馬に潜伏し、天草各地を巡廻
ジョアン・マテウス・アダミ	Pr	1618～1626？	大矢野に潜伏し、肥後・筑前も巡廻
ミカエル・カルバーリョ	Pr	1621	天草
加藤イグナシオ	Ir	1605？～1614？ 1614？～1620	上津浦司祭館 大矢野・上津浦(※1621脱会)
アントニオ・ジャノネ	Pr	1622～1625、1628～1629	天草、大江
マテウス・デ・コウロス	Pr	1629	崎津・大江に潜伏
クリストファン・フェレイラ	Pr	1629～1630	大矢野
斉藤パウロ	Pr	1633	志岐で捕縛後、長崎に送られ殉教

表1 近世初期天草における宣教師の動向

の代表者名と同一であり、組親としてコンフラリアが生きていたことを示している。富岡で投獄されたトマス与左衛門は富岡の奉行の一人であるが、同じくコウロス証言書に大仁田与左衛門の名があり、同一人物の可能性もある。なお、トマス与左衛門はこの後寛永9年(1632)に一家もろとも海に沈められ殉教した。同じく富岡で殉教した「朝鮮生まれの(中略)善良な老人」パウロとは、文禄の役で朝鮮から天草に連行され、コレジオに入った朝鮮人パウロであると思われる。

寺沢期における迫害は、上記のように大きく3つの事件を挙げることができるが、総じて一般農民のキリシタンへの迫害はそれほど悲惨な状況ではなかった。寺沢広高は当初からキリシタン農民の一向宗への転宗を進めていたが、慶長19年までは志岐・上津浦の2箇所とはいえ司祭館の存続とパードレ・イルマンの常駐を容認していた。慶長19年の宣教師追放においても、広高はキリシタンの殉教者に対する崇敬と信仰心の強化を恐れ決して死人(殉教者)を出さぬようにと指示しており、同年殉教した荒川アダムは例外的に処刑せざるを得なかった。元和6年(1620)ジュアン・バプティスタ・ボネッリは、有馬とその周辺の島々は他の地域のように迫害はひどくなく、土地の殿は信仰を承認していると報告している。寛永6年の迫害に至っても宣教師の探索・捕縛が第一目的であり、潜伏を助けた宿主やその土地の主だったキリシタン(組親や世話役など)については、拷問を受けたとしても命まで奪われることは少なかった。慶長19年以降、転ばせることが主たる目的であり、転ばない者は島外に追放されることが多かった。寛永6年以降殉教者の数は増加するが、早い段階から長崎や島原のように大量の殉教者を出すことはなかった。

3. 高浜村転び証文にみる“教え”について

高浜村庄屋上田家文書の中に、寺沢期における転び証文がある。寛永10年6月25日付「高浜村御門徒人数付之帳」と題された史料は、富岡城番代三宅藤兵衛・代官川崎伊右衛門あてに出されたものであり、高浜村庄屋孫兵衛を含む村民198名の署名がある。これまで度々紹介されてきたが、天草の状況の一端を知ることができる貴重な史料であるのであらためて紹介したい。

きりしたんころひ申す書物の事

私儀数年きりしたんにて御座候へ共先年御改めに付きころひ申し一向宗に罷り成り書物仕り差し上げ申し候、然る処に今度赤崎村へはてれん参り候を御とらへ成され候段、いよいよきりしたんの宗門御改めについて全て書物仰せ付けられ候、惣別きりしたんの宗旨魔法の教へにて御座候、内證にてはてれんのゆるし御座候共この書物取戻し申さずてはきりしたんに立ち帰り申す事成らざる教へにて御座候間たとへ如何様の義御座候共最後迄も立ち帰り申す義御座有るまじく候、我等妻子召し遣ひ候者迄も残らずころひ申しきりしたんの宗旨一人も御座無く候、若し立ち帰り申し候はは親子兄弟迄も火あぶりに仰せ付けらるべく候、後日の為此の如くに御座候。以上

寛永拾年西 六月廿五日

庄屋 孫兵衛

(中略)

右この帳面判形の人数最前きりしたんの宗旨御法度に付き皆々ころひ申し我等檀那にて御座候、然る処に今度赤崎村の者はてれん隠し置候に付きなほもってきりしたん御改め候、

いよいよ右よりころはせ申し候一人もきりしたん御座無く候、宗門の義に付き少しも不届き者候は隠し置かず申すべく候、若し自余の口より不届きの様子相聞こえ候はは我等越度とすべく候よって此の件し

寛永十年西ノ六月廿五日

栄念

本史料によると、赤崎村に潜伏中捕縛された伴天連がいて、村に匿った者がいたことからあらためて宗門改が実施されたようである。寺沢期において少なくとも寛永10年以前には宗門改が行われていた事実がわかる。転ばせた場合一向宗門徒としていたことが伺えるが、一向宗への転宗強要については慶長10年(1605)フランシスコ・パシオの年報中にも見られ、寺沢期初期のころから一貫して行われていたことがわかる。栄念とは、高浜村の隣村一町田村にある一向宗安養寺の住職の名であり、寺請証文の体裁となっている。さらに、ここで注意したいのは庄屋孫兵衛が「内證にてはてれんのゆるし御座候共この書物取戻し申さずてはきりしたんに立ち帰り申す事成らざる教へにて御座候」と述べている点である。意識すると「秘密裏にバテレンが(転んだことを)赦すことがあったとしても、この書物を取り戻すことなく、キリシタンに立ち帰る事はしてはいけないという教えであるので」と読み取れる。当時、このような“教え”があったことは非常に興味深い。このような教えが存在したことは知らず、「ドチリナ・キリシタン」などの教義書などにも当然ながら見受けられない。筆者は他の転び証文を未だ実見していないので断言はできないが、大橋幸泰氏や今村義孝氏の論考で紹介された他藩の転び証文に同種の記載は確認できない。潜伏宣教師の指導によるものか、宣教師不在の状況下においてコンフラリア組織内で独自に派生したものか全く分からない。役人の目を逃れるために偽証した言葉である可能性も考えられる。しかし、天草島原の乱が起きる4年前の史料という点を考慮すると、その言葉の意味は重要である。乱当初、大矢野村大庄屋渡辺小左衛門が栖本郡代所で宗門立ち帰りを表明して転び証文を取り返すという行動を取っている。現存史料において、一揆勢が島原で同様の行動を取ったという記録はなく、天草においてもこの一件のみである。パフォーマンスとも受け取れるこの行動の意味に今まで疑問を感じずにはいられなかったが、少なくとも天草においてこのような“教え”が認識され、それを実行した結果であると言えるのではないかと。そして、この行動が一揆当初に行われていることを考えると、天草の潜伏・転びキリシタ

ンたちの蜂起を促すという意図があったのではないかと考えられるのである。

おわりに

本稿では、既出の史料ではあるがあらためて近世初期天草とキリスト教－イエズス会－の状況をまとめてみた。そのねらいは、当該期の天草の状況をできるだけ明確にすることが第一であり、後に続く天草島原の乱の理解へとも繋がるからである。寺沢期の末期に勃発した天草島原の乱は、その発生要因やキリスト教の関り方などを中心に、現在も議論が多い。既述のとおり、天草には寺沢期の一次史料が殆ど存在せず、また、原城のように発掘調査によってキリシタン遺物が出土したという事例もない。今後、新史料の発見が望まれることはいうまでもないが、あらためて慶長～寛永年間の天草の状況を整理し分析する必要がある。近年、浅見雅一氏によって禁教下におけるイエズス会内部の混乱、管区長の資質をめぐる問題と告発など当時機密文書として扱われていた文書が紹介され、イエズス会内の動向も新たな事実が判明している。また、同氏はイエズス会日本管区における「殉教」に関する一般信徒への教えが巡察師ヴァリニャーノ在任時代と異なった点があることも指摘している。本稿では直接触れることはできなかったが、近世初期天草におけるキリシタンの理解に新たな視点をもたらし、禁教下の社会状況と寺沢氏のキリシタン政策の帰結ともいえる天草島原の乱に対しても従来と異なった視点を与えることになるのではないかと感じている。

【参考文献】

- 五野井隆史 「禁制下の宣教師の動向と長崎」(『日本歴史』第361号、1978)
- 鶴田 倉造 「第3章近世前期 第3節寺沢時代の天草」(『本渡市史』1991)
- 鶴田 倉造 「天草キリシタン」(『熊本歴史叢書4 藩政下の傑物と民衆』熊日出版、2003)
- 今村 義孝 『近世初期天草キリシタン考』(天草文化出版社、1997)
- 大橋 幸泰 「キリシタン禁制と宗門改制度」(藤田覚編『十七世紀の日本と東アジア』山川出版社、2000)
- 松田毅一監訳『一六・七世紀イエズス会日本報告集』第Ⅱ期第2巻 同朋舎、1997
- 松田毅一監訳『一六・七世紀イエズス会日本報告集』第Ⅱ期第3巻 同朋舎、1997
- 浅見 雅一 『キリシタン時代の偶像崇拜』(東京大学出版会、2009)

天草における宗門改 — 影踏と踏絵 —

西南学院大学 博物館学芸員
安高 啓明

はじめに

アルメイダ神父が1566(永禄9)年に天草に来島する。ここでおこなわれた布教活動により、新しいキリスト教文化が天草に根付くことになる。キリスト教は信仰の拠り所として多くの人に受け入れられ、キリシタン時代という一時代を築くまでになった。

しかし、1637年から38(寛永14～15)年までにかけてあった島原・天草の乱により、天草島は荒廃する。その後、幕府の援助を受けながら、天領として再興されていくことになる。こうしたなかで、幕府による宗教政策も実施され、ことさらキリシタン政策の影響を如実に受けた地域が天草でもあった。キリシタン穿鑿としておこなわれた宗門改は、その最たるものといえよう。

幕府により徹底的におこなわれた宗門改は、天草の地ではどのようにおこなわれていたのだろうか。本論では天草島における宗門改の実態について、天草大庄屋を務めた木山家文書から明らかにしていきたい。

1. 近世天草の支配

島原・天草の乱(一揆)の終焉により、天草は当初、山崎甲斐守家治の私領となる。山崎家治は1638(寛永15)年から1641(寛永18)年まで天草を支配することになり、この間天草の建て直しを図るものの、なかなか成果があらなかった。そうしたなかで天草代官に就任したのが、行政手腕に定評のあった鈴木重成である。

鈴木重成は自らも一揆勢鎮圧に加担していた人物でもあった。重成は代官として幕府の援助を受けながら、移民入植者を多数受け入れ、生活の保護、領民の保健・衛生思想の普及に努めた。こうしたなかで、天草は天領(幕府直轄領)として位置づけられ、重成の後任には鈴木重辰が代官となる。

鈴木重辰が代官になると、重成の行政を基本的に踏襲しつつ、さらに仏教への帰依や殖産興業を推進

する。1664(寛文4)年まで代官を務めた重辰のあと、戸田伊賀守忠昌の支配下となるも、1671(寛文11)年に小川藤左衛門正辰が代官に就任し天草は再び天領となる。

1671(寛文11)年から1714(正徳4)年まで天草代官による支配がおこなわれる。しかし、これ以降は日田代官や長崎代官、西国郡代や島原城主の預かり地というかたちで支配されることになる。具体的に天草支配の変遷を挙げれば、次のようになる。

1714(正徳4)年から1720(享保5)年までは日田代官、1720年から1768(明和5)年までは島原領主、1768年から1783(天明3)年までは西国郡代が支配した。その後、再び島原領主が1783年から1813(文化10)年まで務め、長崎代官が1813年から1847(弘化4)年まで(うち天保3年3月から6月は西国郡代)、1847年から1861(文久元)年までは西国郡代、1862(文久2)年には再び長崎代官管轄となる。その後西国郡代が1868(慶応4)年まで支配することになる。

天草支配の根幹が天領とされたのは、その地勢的要因が大きかった。天草周辺の海域が海外との主要な海路となっていたために、異国船監視はもとより、抜荷取り締めりの面で有効な場所であった。そのため、島内各所に遠見番所が設けられ監視体制が強化されるとともに、さらに海外との窓口を長崎に限定し、統制していたこともあって、幕府における一要衝として、天領に位置付けられたのである。

2. 絵踏の呼称

天草支配は先に取り上げたように、天草代官以外に島原領主・長崎代官・日田代官・西国郡代が担当している。長く天領として天草は位置づけられたが、天領でありながら、このように支配者が幾度も交代しているのは天草の特徴ともいえよう。例えば、長崎代官であれば、地元出身の高木家が江戸中期から幕末まで代々世襲しているが、天草では継続的なこの動きが確認できない。そのため、行政手続上で、支配者の変更はそのつど、手間と時間を要すること

になる。

このなかでも、宗門改でおこなわれる絵踏はその代表例といえよう。天草でおこなわれる絵踏は、上記した支配者責任のもとで実施される。これにあたり、“踏絵”を踏ませることの表記が、どこが支配していたかによって異なっている。踏絵の呼称はすでに片岡弥吉氏が指摘しているが、例えば、小倉や熊本、島原などでは「影踏」といい、長崎奉行所や幕府宗門奉行の記録には「絵踏」とあることがわかっている(片岡弥吉『踏絵』日本放送出版協会、1969年)。そこでこれをふまえて天草での宗門改を木山家文書からみると次のことを示すことができる。

島原領主預かりだった時代、1805(文化2)年3月27日付御用触には宗門改のことを下のように表記している。

右者明廿八日より麦作見分並為影踏改致出郷候村次人馬無滞出可申候、以上

これによれば、3月28日に麦作見分と「影踏改」のため、巡回するので村継人馬など滞りなくするようにと申し渡されている。ここでは島原藩の宗門改の表現である「影踏改」が、天草大庄屋木山家で記録されていることがわかる。次に長崎代官時代はどうか。1815(文化12)年2月22日付の木山家文書をみると下のようにある。

当郡村々人別踏絵改与して我等儀明廿三日陣屋出立廻村いたし候(後略)

これによれば、天草での人別「踏絵改」(えぶみあらため・ふみえあらため)で、私たちは2月23日に陣屋を出発し巡回するとある。つまり、長崎代官時代は、本支配地である長崎村などでも使われた「踏絵改」と表現していることがわかる。これ以降にも木山家文

書には同じ記載が続く。また、西国郡代時代は次のような表現がみられる。

一当宗門絵踏之義二月中旬より出役廻村相改候
(木山家文書：嘉永3年)

一当宗門踏絵之義二月中旬より出役廻村相改候
(木山家文書：嘉永4年)

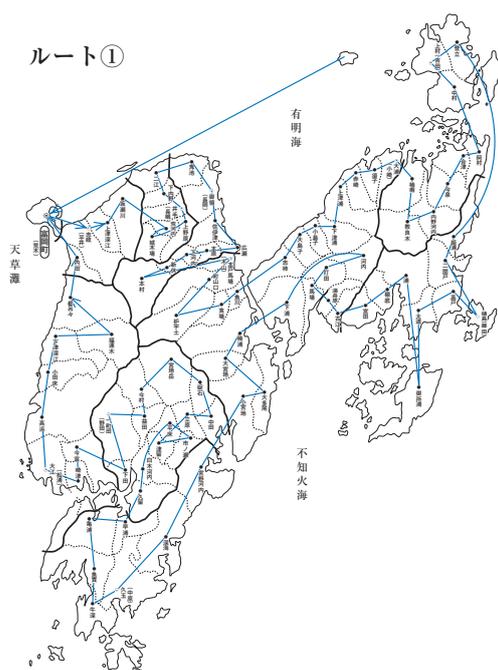
ここには、宗門改にあたって、2月下旬から出役して廻村して改めるとある。1851(嘉永4)年の文書には返り点が付されていることから、「絵踏」と表現していたようである。

支配替わりごとに宗門帳の仕立て方の変更を指示された。1813(文化10)年に島原領主から長崎代官へと替わるが、これにあたって次のようなことが申し渡された。

一宗門帳上ハ書宗門御改踏絵帳与相認候事

これによれば、宗門帳の表紙には「宗門御改踏絵帳」としたためることとある。これまでは島原領主により治められていた天草は「宗門御改影踏帳」と表紙に記載されたが、所轄替えにともなって変更を指示されているのである。つまり、絵踏をおこなったうえで作成される宗門人別改帳の体裁は、本支配していたところから従っているのである。支配替えが頻繁にあった天草では、たびたびその変更がおこなわれ、そのもとで人別帳が提出されていたのである。

これを示すように、本展覧会でも展示している宗門改人別帳にはそれぞれ異なる表記がみられる。島原領主時代の1762(宝暦12)年には「午年宗旨御改影踏帳」とあり、1827(文政10)年の長崎代官時代に作成された宗門帳の表紙は「宗門御改踏絵帳」となっている(本図録26頁参照)。このように、度々支配替えがおこなわれた天草では、そのつど宗門帳の体裁も変更



『天領天草 大庄屋 木山家文書』御用触写帳第1巻
(本渡市教育委員会、1995年) 3頁所収地図を改編

していたのであった。

3. 宗門改の実施

宗門改は天草でも実施されていたが、天草では長崎奉行所から踏絵を借りておこなわれていた。天草での絵踏の実態については、片岡弥吉氏によりすでに指摘されている。ここで片岡弥吉氏は島津天主堂が所蔵しているフランス語ノートをもとに記しており、簡単にその概要を示しておきたい。

旧暦3月頃、富岡から御本船といって役人を乗せた船がくると庄屋の家より触があり、村人らは衣服を正して庄屋の家に集まる。役人は通常お殿さまと呼ばれ、四、五人で庄屋に入る。役人は縁側に脇息にもたれて腰かけ、役人は名ある人より順に従って絵を踏む。

これにより、天草での絵踏は庄屋宅でおこなわれ、役人が天草に来島して各村を巡回していることがわかる。この天草島内の巡回については、複数通りを確認することができる。表1で掲げたものは、木山家文書で確認できる宗門改のルートを確認できるもののみを、まとめたものである。

これによれば、概ね五つのルートを確認することができるが、基本的には東廻りルートをとっていたようである。天草での宗門改は本領からの役人が派遣されておこなわれるため、天草側は受け入れ態勢を綿密に取り決めていた。大庄屋などから先触が各村に渡され、何月何日にどの村で昼食をとるか、さらにはどこで宿泊するかが連絡されている。また、延長してしまう場合も、逐一触が廻っているなど天草の役人は迎える立場に徹していたことがわかる。

木山家文書でみる天草での絵踏は、原則として春におこなわれており、特に2月から3月に集中していたようである。これは本領での宗門改の時期と関係があった。例えば、島原藩領は正月25日、26日に

城下町でおこなわれたのち、村々で実施される。ここに1ヶ月かかったとしても、2月25日・26日、それから天草へ向かうことになる。

長崎に至っては正月3日に町年寄などが、4日から市中でおこなわれ、9日にはおわる。その後、代官支配の村方で実施され、長崎村・浦上村は1月12日から17日までかかった。2月に入って、日見村などでおこなわれたが、長崎村・浦上村でおわってから天草へ移動していたことがわかる。

踏絵は長崎奉行所から貸し出されて実施される。島原領や長崎代官は長崎奉行所へ貸出の願いを出して、これが許可されて宗門改をすることができた。つまり、自領(本領)での宗門改が終わってから、天草へ出役することになっていた。貸出願いにあたっては、天草での宗門改を視野に入れて貸出期間を設定していたものと思われる。

宗門改は当初、単独でおこなわれていたが、次第にはほかの業務と兼ねるようになっていく。天草では、検地巡回を村方でやっていたようだが、収穫前の状況を調査する「麦作見分」と兼ねている。寛政年間に絵踏の時期が3月から4月へと移行しているが、この原因は「麦作見分」と兼ねたためであろう。1800(寛政12)年の状況をみると、2月14日付の宗門改の廻状があるが、4月24日付で麦作見分の廻状がでている。2ヶ月間で再び役人巡見していたことを合理的に処理するために、宗門改・麦作見分を同時にやるようにしたのである。1801(寛政13)年には4月13日付の廻状で宗門改・麦作見分がおこなわれるようになっていく。その後、麦作見分にかかわって、「貯改改」を兼ねるようになるなど宗門改との合理化が図られていたのである。ひとえに天草という離島かつ遠国地であることが支配者、そして島内役人への負担軽減を促す結果となった。

表1でも示したように、天草全域の村々を廻りして絵踏をおこなっているが、事情によりおこなうこ

表1. 宗門改ルート

ルート①	湯島⇒富岡町⇒志岐～都呂々村⇒内田村⇒富岡町 寛政2年：2/19 寛政7年：2/23 寛政12年：3/3 寛政13(享和元)：5/6 享和2年：3/7 享和3年：3/4 文化3年：3/18 文化4年：3/23 文化5年：3/11 文化6年：3/10 文化8年：3/8 文化9年：3/10 文化10年：3/11 文化11年：2/15 文化12年：2/12 文化13年：2/23 文化14年：2/20 文化15年：1/25 文政2年：1/24	東廻り
ルート②	湯島⇒二江村⇒下内野村～志岐村⇒上津深江村⇒坂瀬川村⇒富岡町 寛政6年：2/19 寛政9年：2/28	東廻り
ルート③	湯島⇒上村⇒登立村⇒中村⇒上津深江村～都呂々村⇒志岐村⇒富岡村 文化7年：3/13	北・東廻り
ルート④	富岡⇒都呂々村⇒福連木村～上津深江村⇒志岐村⇒内田村 文政3年：1/25 文政5年：1/24	西廻り
ルート⑤	富岡⇒内田村⇒志岐村～湯島～大多尾村⇒小宮地村⇒中田村 文政6年：2/25 文政8年：2/5	東廻り

註

本表ならびに宗門改巡回図は「天領天草 大庄屋 木山家文書」御用触写帳第一巻～第七巻より作成した。

ルート⑤はこれ以降も続いたものと想定される。

とができないこともあった。その第一の理由は、長崎奉公中で留守にしているときである。天草からはしばしば長崎に日雇奉公などで向かうものがいた。そうした場合、天草での絵踏ができないため、不在にしているときは大庄屋まで届ける必要があった。また、疱瘡により村ごと巡見ルートからはずれることもあった。疱瘡により複数の村が絵踏を免除されるなど、特例措置もとられていたことがわかる。宗門改の徹底が幕府により指示されるものの、現地では例外事案も生じていたのである。

4. 絵踏の最期

宗門改の際に実施されていた絵踏は長い年月のなかで年中行事化していった。本来のキリスト教徒穿鑿の本義から離れ、儀式化していたようである。長崎での遊女の絵踏にはおおくの見物客があつまるほどであったことはすでに知られている。長くおこなわれていた宗門改も非キリシタンにとっては、一種の定例行事にすぎなくなっていたのである。

一方、外国からの絵踏の廃止を求める声は次第に高くなっていく。オランダ商館長であったドンケル・クルティウスは、強く絵踏の廃止を長崎奉行に進言し、これをもとに長崎奉行は、幕府に絵踏本来の意義が薄れ、一儀式のようになっていると報告している。これをうけて、1858(安政5)年正月から絵踏の廃止が指示され、長崎はもとより各地に広まった。当然、安政五ヶ国条約などでの要求も背景にあったが、絵踏をやるのがかえって外交上の支障をきたしたのである。絵踏廃止にともなって、「宗旨改影踏帳」は「宗旨改帳」と変更されることになった。

このころの天草の状況をみれば、天草でも宗門改が一儀礼化していた様子を看取することができる。

然者、宗門御改之節は迄村々におゐて役場庭先ニ小間物食品等持出し売買致候得共今度人別御改方格別嚴重被仰出候ニ付而ハ商人等立売候而者混雜いたし候ニ付評義之通り一同差留方御取計可被成候 (木山家文書：万延元年)

宗門改のときに、これまで各村の役場庭先で小間物や食品などを持ち集い売買していたが、今回の人別改は嚴重におこなうので、商人などが立ち売りしていたら混雑するので、評議のとおり、一同控えるようにと申し渡している。宗門改の時に、天草では出店がでるほど賑やかだったようすがうかがえる。それは本領からの役人はもとより、絵踏をおこなう人々が往来したため、商売の格好の場となっていたのである。厳格に実施されるべき宗門改が天草では大衆化しているようにもみえる。

1858年に長崎で絵踏が廃止されるも、天草には1860(万延元)年に絵踏中止の指示が出ている。木山家文書によれば次のことが記されている。

切支丹宗門改之儀踏絵申付候処江戸表より御沙汰之趣長崎奉行より掛合有之候ニ付、踏絵者不申付候得共右宗門者前々より重キ御禁制ニ付弥厳敷可改旨被仰渡改方相弛候事ニハ無之

これによれば、キリシタン宗門改のときに絵踏を申し付けていたが、江戸表から中止の旨の連絡が、長崎奉行を通じてあったので、今後おこなわないことにする。しかし、宗門は以前から厳しく禁じられているので、改めを緩めることのないようにすることとある。ここでようやく宗門改での絵踏が廃止されたのであり、長崎に遅れること2年後だった。しかし、絵踏をやめるだけであって、キリスト教の信仰が許されたわけではなかったのである。絵踏にかわる宗門改の模索が始められることになった。

天草でも絵踏の廃止にともなって、宗門帳の体裁もこれまでとことなってくる。1860年は西国郡代の支配であったが、これまでの「影踏」や「踏絵」などの文字が消え、「宗門御改証文」や「宗門人別御改帳」などと表紙に記された。また、宗門人別帳作成にあたっては、従来どおり、役人が廻村して宗門改をおこなっていたのである。ひとえに、幕府は依然としてキリシタン禁制の方針をとったため、絵踏という手法を撤廃したものの、禁教解除そのものは1873(明治6)年まで待つことになった。

おわりに

絵踏の実施は各地域によってさまざまである。天草のように支配者が頻繁に変わった場合、宗門改人別帳の表記そのものを変更しなくてはならなかった。それは、「絵踏」の表現が地域によって異なっていたためであり、支配者の本領での表現に逐一改められていたのである。事務手続上、煩雑ではあるものの、支配にあわせた公文書を天草の役人は作成していたのである。

各地域で徹底的におこなわなければならない絵踏も旅中や奉公中により免除となることもあった。また、疱瘡などの急事に対して免除をあたえるなど、従来の絵踏制は形骸化していたようである。遠隔地ゆえともいえようが、文化年間におこった天草崩れなどの例をみれば、むしろ絵踏は強化されなければならなかった。

このようななか、宗門改は著しく本来の意義とかげ離れていた。麦作見分や貯粉改などと兼ねるようになるなど、嚴重におこなわなければならない宗門改も合理化のもとで変更せざるを得なかった。さらに絵踏がおこなわれる場所には、出店があるなど、絵踏自体が興行としてとらえられていたようにも感じる。幕府が考えている絵踏と実際におこなう地域ではおおきな隔たりが生じていたのである。

謝 辞

本展覧会開催ならびに図録編集にあたり、下記の方々にお世話になりました。ご協力いただきました関係各位に深く感謝の意を表します。

鶴田一郎	天草市立天草キリシタン館
中山 圭	天草市教育委員会
松本博幸	九州大学附属図書館付設記録資料館
御寄 求	財団法人秋月郷土館
山田 寛	鶴田一郎事務所
山野 桂	船の科学館・海と船の博物館ネットワーク

(五十音順、敬称略)

イベント情報

◎第9回特別展関連公開講演会

日時 6月18日(土) 14:00～16:00

場所 西南学院大学博物館2階講堂

基調報告

- ・安高啓明氏(本学博物館学芸員)「海流に魅せられた島 天草」
- ・中山 圭氏(天草市教育委員会学芸員)「海の領主天草五人衆と関連遺跡出土陶磁器」
- ・松本博幸氏(天草切支丹館学芸員)「天草とキリスト教」

シンポジウム

「テーマ：天草島における海外交渉とキリシタン文化」

司 会：高倉洋彰氏(本学博物館長)

パネリスト：安高啓明氏・中山 圭氏・松本博幸氏

◎せいなんこどもワークショップ

船のペーパークラフトをつくろう

日 時 6月25日(土) 10:00～12:00

集合場所 西南学院大学博物館

参加費 50円(保険料)

■海流に魅せられた島天草ー祈りの原点とキリシタン文化出品目録

I. 海流融合の地 天草

番号	資料名	数量	法量	所蔵先	備考	
1	天保国絵図	Map of the Tenpo period	1	-	国立公文書館	画像展示
2	南蛮船(帆船)	Portuguese (Namban) Ship	1	H58×W76×D25	天草市立天草キリシタン館	
3	登壇必究	Toudanhikkyu	1	-	九州大学附属図書館付設記録資料館	画像展示
4	武備志	Bubishi	1	-	九州大学附属図書館付設記録資料館	画像展示

II. 天草島と文化の芽生え

番号	資料名	数量	法量	所蔵先	備考	
5	アルメイダ像デッサン	Sketch of Luis de Almeida	1	H76×W60×D2	天草市立天草キリシタン館	画像展示
6	天草本 伊曾保物語	Aesop's Fables	1	H4×W26×D26	天草市立天草キリシタン館	
7	天草本 平家物語(復刻本)	The Tale of the Heike	1	H4×W26×D19	天草市立天草キリシタン館	
8	メダル(メダリオン)	Medallion	1	H9×W7×D0.5	天草市立天草キリシタン館	市指定文化財
9	織部南蛮人燭台	Candlesticks	1対	H32×W11×D11	天草市立天草キリシタン館	
10	キリシタン鋏	Christian scissors	1	H15×W5×D0.5	天草市立天草キリシタン館	

III. 弾圧とその果てに

III-1. 天草四郎と島原・天草の乱

番号	資料名	数量	法量	所蔵先	備考	
11	破提字子	Hadeus	1	H25×W18×D1	天草市立天草キリシタン館	
12	天草四郎原画 祈り	Portrait of AMAKUSA Shiro	1	H140×W115×D8	天草市立天草キリシタン館	
13	肥前甘草富岡城図	Map of Tomioka Castle	1	H53×W64×D3	天草市立天草キリシタン館	
14	有馬原城落城図	Map of Hara Castle	1	H140×W120	天草市立天草キリシタン館	
15	天草四郎陣中旗	Flag of rebel army	1	H108.6×W108.6	天草市立天草キリシタン館	複製パネル
16	島原陣図屏風(戦闘図)	Rebellion at Shimabara		H165.0×W360.0	財団法人秋月郷土館	画像展示
17	天草筒	Amakusa-dutsu [gun barrel]	1	H6×W120×D12	天草市立天草キリシタン館	
18	筑紫薙刀	Chikushi-naginata [Hatchet sword]	2	H3×W145×D11	天草市立天草キリシタン館	
19	天草・島原の乱手負討死一件	Records of Amakusa-Shimabara Rebellion	1	H340×W22	天草市立天草キリシタン館	

III-2. 弾圧と信仰のはざま

番号	資料名	数量	法量	所蔵先	備考	
20	鈴木三公肖像画	Triangle of portraits of Suzuki	1	H150×W38×D3	天草市立天草キリシタン館	
21	破切支丹(全)	Hakirishitan	1	H28×W38×D3	天草市立天草キリシタン館	
22	宗門人別改帳	Documents with the name of apostates	2	H2×W20×D27	天草市立天草キリシタン館	
23	踏絵関係文書	Documents of Fumie	1	-	天草市立天草キリシタン館	

III-3. 島の信仰

番号	資料名	数量	法量	所蔵先	備考	
24	ロザリオとつぼ	Rosary and pot	5	H16×W30×D25	天草市立天草キリシタン館	市指定文化財
25	切支丹燭台	Christian candlesticks	1	H30×W11	天草市立天草キリシタン館	
26	銭仏 壁仏	Cross of coins / Wall Buddha	2	壁仏H4×W2×D1 銭仏H16×W9×D0.2	天草市立天草キリシタン館	
27	潮隠しクルス	Cross hidden in the tide	1	H28×W63×D66	天草市立天草キリシタン館	
28	聖水鉢	Bowl for holy water	1	H27×W25×D26	天草市立天草キリシタン館	
29	十字入佛石	Image of Buddha carved with cross	1	H70.0×W25.0	天草市立天草キリシタン館	
30	十字架	Cross	1	H5.0×W3.8	天草市立天草キリシタン館	
31	IHS紋入り聖杯	The holy Grail with IHS emblem	1	H23×W24	天草市立天草キリシタン館	
32	隠し十字佛	Image of Buddha carved with cross	1	H44×W15×D12	天草市立天草キリシタン館	
33	鏡仏	Bronze mirror	1	H1.5×W1.2	天草市立天草キリシタン館	
34	納戸神	The holy mirror enshrined in the altar	1	H29.0×W18.5	天草市立天草キリシタン館	
35	納戸神	The holy mirror enshrined in the altar	1	H33.0×W22.0	天草市立天草キリシタン館	
36	大黒天像	Small statue of Daikokuten	1	H10×W9×D7	天草市立天草キリシタン館	

IV. 海外交流の地天草

IV-1. 浜崎遺跡出土遺物

番号	資料名	数量	法量	所蔵先	備考	
37	福建系白磁	White porcelain of Fujian	1	H14.0×W12.0	天草市教育委員会	
38	同安窯青磁	Celadon of Tong'an	1	H7.8×W9.0	天草市教育委員会	
39	景德镇系白磁・青白磁	Jingdezhen white porcelain / blue porcelain	2	H9.5×W9.5 ×W4.0 H3.0	天草市教育委員会	
40	龍泉窯青磁	Celadon of Longquan	1	H13.0×W13.0	天草市教育委員会	

IV-2. 棚底城跡出土遺物

41	漳州系青花	Zhangzhen type Blue-and-white	1	H10.5×W5.5	天草市教育委員会	
42	景德镇系青花	Jingdezhen type Blue-and-white	1	H9.0×W7.8	天草市教育委員会	
43	景德镇系青磁	Jingdezhen type celadon	1	H8.0×W4.8	天草市教育委員会	
44	ベトナム産青花	Vietnamese Blue-and-white	1	H6.8×W4.9	天草市教育委員会	

IV-3. 河内浦城跡出土遺物

45	ベトナム産鉄絵大盤	Vietnamese underglaze plate with iron brushwork	1	H28.5×W28.5	天草市教育委員会	
46	中国産擂鉢	Chinese earthenware	1	H30.5×W30.5	天草市教育委員会	
47	青磁	Celadon	1	H13.6×W13.3	天草市教育委員会	
48	灰色磁器皿	Gray porcelain dish	1	H8.5×W5.5	天草市教育委員会	

IV-4. 三川城跡出土遺物

49	漳州系青花	Zhangzhen type Blue-and-white	1	H7.0×W9.0	天草市教育委員会	
50	華南三彩角瓶	Color glazed square bottle of southern China	1	H4.5×W2.0	天草市教育委員会	
51	景德镇系緑地金襴手碗	Jingdezhen type green glazed bowl	1	H2.8×W5.0	天草市教育委員会	

西南学院大学博物館 2011年春季特別展

開館5周年記念特別展
海流に魅せられた島 天草
—祈りの原点とキリシタン文化—

編 集 安高 啓明

英文翻訳 中松 沙織

編集補助 貞清 世里、平川 知佳、中尾 祐太
中松 沙織、小林 史奈

発 行 西南学院大学博物館
〒814-8511 福岡市早良区西新3丁目13番1号
電話092-823-4785

発 行 日 2011(平成23)年6月6日

印 刷 株式会社 インテックス福岡



西南学院大学博物館

SEINAN GAKUIN UNIVERSITY MUSEUM

URL www.seinan-gu.ac.jp/museum/

西南学院大学

一粒の麦から、
次の100年に向かって

